

宇都宮大学国際学部国際社会学科

2007年度 卒業論文

「“とちぎ熱気球インターナショナルチャンピ
オンシップ”における広域的な街づくり」

指導教官 中村 祐司

学籍番号 040114M

論文執筆者 金田 朋子

要約

熱気球ホンダグランプリが全国各地で開催され、各地で熱気球による街づくり、町おこしが行われている。熱気球の基本的な構造や競技内容を説明したあとに、熱気球の持つ魅力などについて言及した。そして熱気球ホンダグランプリの特徴をみていくとともに、各地で開催されている熱気球の大会の様子、街づくりとしてどのようなことが行われているかを調査した。さらに大会では地元の人々からなる大会主催組織が確立し、地域振興運動のモデルとして表彰を受けるなど地域密着の街づくりとして実績がある。

栃木県においても茂木町で大会が開催され、地元の組織によって大会が運営されてきた。昨年、栃木熱気球世界選手権が盛大に開催されたことから、今年から宇都宮市も加わり、より広域的な大会へと発展しつつある。そこで栃木県における大会の概要とともに、以前から大会に関わっている茂木町、今年から本格的に関わっている宇都宮市それぞれの行政からこの大会への取り組み方などを調査し、さらに地元の人々から構成され、大会主催組織であるとちぎ熱気球選手権実行委員会の取り組み、地域住民の取り組み、宇都宮大学熱気球サークルの大会への参加などについて言及している。

熱気球ホンダグランプリ開催地域である佐賀県佐賀市・長野県佐久市・三重県鈴鹿市を事例として調査し、それぞれの街づくりや大会の様子、地域や大学の取り組みと栃木県で開催された熱気球ホンダグランプリの最終戦である「とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップ」を比較し、栃木県の特性などから見えてくる観光資源としての可能性、栃木県における行政・地域・大学の連携によって成される街づくりの可能性について提言している。

目次

はじめにー

第1章 熱気球ホンダグランプリの位置づけ

第1節 日本で開催される大会

第2節 熱気球ホンダグランプリの概要

(1) ホンダグランプリとは

(2) ホンダグランプリの歩み

(3) ホンダグランプリの意義ーAir-B 会長 町田耕造氏インタビューからー

第2章 熱気球が文化となった街ー佐賀県佐賀市ー

第1節 佐賀インターナショナルバルーンフェスタの概要

第2節 2006年実績報告より

第3節 成長してきた背景

第4節 今後の展開

第3章 子供たちに感動をー長野県佐久市ー

第1節 佐久バルーンフェスティバルの概要

第2節 2007年事業報告書より

第3節 地域全体で取り組む街づくり

第4節 今後の課題

第4章 中部地方で初めて開催された大会ー三重県鈴鹿市ー

第1節 鈴鹿バルーンフェスティバルの概要

第2節 2007年実施報告書より

第3節 行政・地域・大学の働きとは

第4節 今後の課題

第5章 バルーンフェスタ in 代々木の開催について

第6章 とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの現状

第1節 とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップへの移行について

- (1) MOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップについて
- (2) とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップへ移行した背景

第2節 2007 とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの概要

第7章 とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの展望

第1節 行政・地域・大学の取り組みについて

- (1) 行政の取り組み～茂木町、宇都宮市からの視点～
- (2) 地域の取り組みについて
- (3) 宇都宮大学熱気球サークルの取り組み

第2節 先進事例からみるとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップ

- (1) 積極的な広報活動
- (2) 中核となるキーマンの必要性

第3節 とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップを超えた街づくりへ

おわりにー

参考：「熱気球の基礎知識」

- (1) 熱気球の概要
 - ①熱気球の構造
 - ②熱気球の大きさ・形
- (2) 熱気球の飛行について
 - ①熱気球の飛行場所・飛行条件
 - ②ライセンス
- (3) 熱気球の競技
 - ①競技内容
 - ②熱気球の競技（タスク）について
- (4) 熱気球史

①熱気球のはじまり

②日本での熱気球の普及

あとがき

参考文献・資料

はじめに

スカイスポーツである熱気球。熱気球を通して、地域活性化、街づくりを行うことができないか。そこから始まったものが、選手の育成と街づくりを担った熱気球ホンダグランプリである。佐賀県で始まった熱気球の大会は、いまや約80万人を集客するまでに成長し、佐賀一の観光イベントとなっている。同じく長野県佐久市、三重県鈴鹿市でも熱気球ホンダグランプリの1戦が行われ、県内、県外問わず多くの人が訪れており、熱気球はスポーツのひとつでありながら、観光資源という一面を併せ持つものとなっている。

栃木県茂木町でも9年前から熱気球ホンダグランプリの第5戦が行われていた。昨年、茂木町、宇都宮市で熱気球世界選手権が盛大に開催されたこともあり、今年から茂木町だけでなく宇都宮市をメイン会場とし、芳賀町、茂木町、市貝町を中心に「とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップ」が広域的に開催されることとなった。

熱気球ホンダグランプリでは、熱気球の競技だけでなく係留や熱気球教室、夜間係留など観客参加型の熱気球イベントや地域色を打ち出した出店やステージイベントなどがあり、地域活性化を担った大会である。また地元の人々から成る主催組織を作り、大会を運営しているという地域密着型の大会なのである。

昨年の栃木熱気球世界選手権に筆者がボランティアとして参加し、熱気球の持つ魅力に触れ、熱気球の持つ街づくりの可能性に惹かれたのが卒業論文のテーマにしようと思ったきっかけである。東京という大都市をバックに抱えている栃木県で、関東圏で唯一の国際大会が行われ、さらに今年から50万人年である宇都宮市が加わったことによって、よりアクセスがよくなり、県内はもちろん県外の多くの人々に周知され、佐賀の大会を超えるものになる可能性が大いにある。熱気球で街づくりを行っている佐賀市、佐久市、鈴鹿市の事例をみていき、とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップのこれからの在り方について論じていく。

本論第1章「熱気球ホンダグランプリの位置づけ」では、日本で開催される熱気球の大会をみていき、その中における熱気球ホンダグランプリの位置づけをみていく。そして熱気球ホンダグランプリの目的や意義を論じ、どのように街づくりに関わっているのかを論じていく。

第2章「熱気球が文化となった街ー佐賀県佐賀市ー」、第3章「子供たちに感動をー長野県佐久市ー」、第4章「中部地方で初めて開催された大会ー三重県鈴鹿市ー」では、熱気球ホンダグランプリ第4戦の開催都市である佐賀県佐賀市、第2戦開催都市の長野県佐久市、第3戦開催都市である三重県鈴鹿市の事例を調査し、どのような事業が行われ、観客動員数や経済効果などから実態を分析して論じる。第5章「バルーンフェスタ in 代々木の開催について」では、事例で取り上げた3都市が積極的に行っている東京でのバルーンフェスタの告知イベントの概要などをみていき、「とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップ」のまちづくりについて論じている。

第6章「とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの現状」では、とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの事業内容や実際の大会の様子を分析していく。第7章「とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの展望」では、茂木町、宇都宮市それぞれの考え方や地域の取り組み、宇都宮大学熱気球サークルの取り組みをみていき、3者連携のとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップを越えた広域的な街づくりについて論じる。

また熱気球といっても、どのようなものであるか、飛ぶ原理や飛行条件、競技方法など、具体的にイメージしにくいであろう。本論文の理解を深めるために、p 47～p 55まで「熱気球の基礎知識」として熱気球の構造や競技などの基礎知識をまとめた。随時参考にしてほしい。

第1章 熱気球ホンダグランプリの位置づけ

日本では各地で熱気球の大会が開催されている。本章では、昨年から宇都宮市で開催されている「熱気球ホンダグランプリ」の位置づけ、意義、歩みを理解していくこととする。熱気球ホンダグランプリに関して、NPO 法人熱気球運営機構（略称 Air-B）会長である町田氏にインタビューを行った。Air-B は、熱気球ホンダグランプリの開催に携わっている団体であり、①熱気球で人と自然をつなぐ、②熱気球で子供たちを育む、③熱気球でまちづくりのイメージを広げるというコンセプトのもと大会を開催している。

第1節 日本で開催される大会¹

日本では、年間約 29 もの熱気球の大会が行われており、北海道から熊本県までさまざまな場所で開催されている。また時期も、夏場は気温が高いためあまり行われませんが、春から冬まで 1 年中行われている。大会の規模もそれぞれであり、ローカルな大会や日本のトップレベルが競う日本選手権や学生によって行われる学生選手権などがある。その中でも日本選手権は、その年の熱気球日本一のパイロットを決める競技大会であり、日本人で規定の飛行時間等をクリアしているパイロットのみがエントリーできる非常にレベルの高い選手権である。またこの大会は、2 年に一度開催される熱気球世界選手権の選考会も兼ねている。

その中でも熱気球ホンダグランプリは、日本各地で行われる熱気球大会をシリーズ戦としてチームで転戦し、年間で総合優勝チームを決定する熱気球競技であり、各地で行われる会場には出店ブースやスポンサーブース、ステージなどが用意され、観客参加型の熱気球イベントとして地域活性化を担っている大会である。次節からは、熱気球ホンダグランプリの詳細や歩み、そして地域活性化を担っている意義などについてまとめていく。

第2節 熱気球ホンダグランプリの概要

(1) 熱気球ホンダグランプリとは²

熱気球ホンダグランプリは、日本各地で行われる熱気球大会をシリーズ戦としてチームで転戦し、年間で総合優勝チームを決定する熱気球競技である。現在では、国内全 5 戦の「熱気球ジャパンホンダグランプリ」の他に、アメリカ・ヨーロッパ・アジアを結ぶ「熱気球ワールドホンダグランプリ」全 3 戦も行われている。栃木県では 4 月に第 1 戦が藤岡町で、11 月に第 5 戦が茂木町と宇都宮市で行われている。その他の地域では、第 2 戦が 5 月に長野県

¹ 日本気球連盟 HP「2007 大会予定」<http://www.jballoon.jp/jimu/2007taikai.html> および NPO 法人熱気球運営機構（Air-B）HP「熱気球ホンダグランプリとは」<http://www.air-b.com/2.gp/whats-gp.htm> を参照。

² 前掲 NPO 法人熱気球運営機構（Air-B）HP「熱気球ホンダグランプリとは」を参照。

佐久市で、第3戦が9月に三重県鈴鹿市、第4戦が10月から11月にかけて佐賀県佐賀市で行われている。

グランプリ参加の各チームはそれぞれの大会の優勝を争うと共に、一回ごとの競技の順位に与えられる“グランプリ・ポイント”を獲得し、その累積ポイント数によって決まる年間優勝を目指す。各大会の優勝は、競技の計測結果が直接反映した得点の合計で決まるが、グランプリでは競技ごとにライバルよりわずかでも良い成績を取ればポイントが高くなるため、従来とは違った駆け引きも生まれた。

グランプリ各大会は、日本選手権クラスの高度な競技内容に加え、それを分かりやすく観客に伝えるための実況アナウンスを行い、他のスポーツ同様の「観戦する楽しみ」を伝え、盛り上げている。また、グランプリ大会の定番となった夜間係留や熱気球教室といった観客参加型熱気球イベントの他、それぞれの地元色を打ち出したイベントがあり、大会ごとに工夫されている。

その点で「熱気球ホンダグランプリ」は、競技者、来場者、そして大会の地元スタッフが一体となったハイ・クオリティな熱気球大会のシリーズであり、まちづくりという一面を持っている大会である。

(2)熱気球ホンダグランプリの歩み³

熱気球ホンダグランプリの始まりは、1993年までさかのぼる。国内全4戦、参加チームは18チームでスタートした。会場は、長野県佐久市、北海道上士幌町、三重県鈴鹿市、佐賀県佐賀市である。現在大会が開催されている5会場のうち3会場は、第1回から会場となっている。翌年の1994年には、栃木県小山市が会場として加わり、全5戦となった。1997年は、グランプリ最終戦と熱気球世界選手権を佐賀県佐賀市で同時に開催し、参加チームが33チームと増加した。1998年には熱気球ワールドグランプリがスタートし、アメリカ、ヨーロッパ、日本を会場とし、全3戦25チームが参戦した。1999年には、栃木県茂木町が会場として加わり、またジャパンホンダグランプリに海外選手も参戦し、よりグローバルな大会となった。2000年からは、開催地が現在と同じになり、より地域に根付く大会となっていった。

2002年に、ジャパンホンダグランプリの累計観客動員数は1,000万人を突破した。2003年には、グランプリ10周年を迎え、国際航空連盟より「オノラリー・グループ・ディプロマ」を受賞し、2004年には、世界選手権で日本のパイロット2名がトップテン入りを果たすなど、より大きな大会へと発展し、日本人選手の技術向上など大きな意義を見いだしてきた。そして2006年には、ジャパンホンダグランプリ第4戦が栃木県宇都宮市を会場とし開催された。今年2007年には、ホンダグランプリ最終戦が宇都宮市をメイン会場にし、茂木町、芳賀町などが会場になるなど、スケールアップして開催された。

³ NPO 法人熱気球運営機構（Air-B）会長町田氏からいただいた提供資料「Hot Air Balloon HONDA Grand Prix-2007 熱気球ホンダグランプリ-」を参照。別紙資料として年表作成した。

(3)熱気球ホンダグランプリの意義⁴

前述したように、熱気球ホンダグランプリは競技だけではなく観客も参加し盛り上げていく大会である。熱気球ホンダグランプリを運営に携わっている Air-B 会長である町田構造氏のインタビューからグランプリの目的、熱気球による街づくりの魅力を探っていこうと思う。

まずグランプリ開催の目的は、日本のパイロットの育成、技術の向上のためである。そのために日本国内において様々な地形で競技を行うことが必要であり、競技会をつくり、年間約 50 タスクを行うことを目的にグランプリを開催した。風の少ない盆地での開催やいろいろな季節に行うことで世界に通用するパイロットを育てることが目標であった。実際に、1989 年の世界選手権では、日本の選手は海外の選手に歯が立たない状態だったが、2006 年の世界選手権では日本人選手が上位に何人も食い込んできており、グランプリ開催の成果が出ている。

またグランプリにはもう一つ目的があるのだ。それは、①熱気球で人と自然をつなぐ、②熱気球で子供たちを育む、③熱気球で街づくりのイメージを広げるという目的である。これは、熱気球を通して子供たちを育み、自然を感じてもらい、地域の活性化に役立つものをつくりたいという思いからである。ホンダグランプリの大きな特徴として、親子連れの観客が多いということが挙げられる。他のイベントにおいて親子連れで楽しめるものはそう多くないであろう。熱気球を通して親子の絆を深め、子供たちに自然を感じてもらうことがねらいである。さらには、ホンダグランプリというイベントにより街づくりの幅を広げようということである。

このように、グランプリは選手の技術向上のほかに熱気球による街づくりを視野にいれた他の大会には類を見ないイベント型の大会なのである。

もう一つ特徴的なものがある。それは、主催団体と各自治体と協賛企業が一体になって、大会を運営することである。この 3 団体つまり地域の人々で主催組織をつくり、イベントを作り上げるのだ。日本では、イベントを行う場合、広告代理店が仲介をするというのが一般的である。町田氏がホンダグランプリで行っていることは、それを一切排除して、この 3 者で広告代理店の役割を果たしているということである。広告代理店が仲介に入る場合、利益が広告代理店に入るため地元利益が落ちなくなるという構図ができる。さらに自治体や企業、大会を行っている人全てが広告代理店にクレームをつけるため、責任の所在がどこにあるか分からなくなってしまうのだ。

広告代理店が行っていたテレビや新聞などへの広報活動、スポンサー集めのノウハウなどを地元の主催組織の中に作り上げているのだ。メインスポンサーである本田技研工業株式会社とは直接契約をし、スポンサーが行いたいことなどは直接話し合い、実現可能な範囲で実行している。

今現在は、第 4 戦の佐賀市の大会以外は大会運営に Air-B が関わっているが、将来的には

⁴ NPO 法人熱気球運営機構 (Air-B) 会長町田氏インタビュー (07.5.12) および提供資料より。

地域の人々で運営を行い、地域に全てのノウハウと共に主催組織が残ることが、地域にとって大きな財産なのである。

町田氏が作り出したかったもの、伝えたいことは、文化であり、「時代を超えて残っていくもの」なのである。時代を超えて残るものをつくり、次の子供たちに伝えたいという思いからさまざまな場所で各地域の人々と共にホンダグランプリを開催している。

ホンダグランプリは、競技のほかに街づくりという大きな意味を持つ大会である。さらに、地元の人から成る主催組織をつくり、大会運営のノウハウ、イベントの利潤を地域に残すという地域密着型のイベントである。

次章からは、その先進都市であり積極的に街づくりを行っている佐賀県佐賀市、長野県佐久市、三重県鈴鹿市の事例をみていくことにする。

第2章 熱気球が文化となった街ー佐賀県佐賀市⁵ー

⁵佐賀市経済部観光課・文化課溝上氏インタビュー（07.8.25）および提供資料、2007 佐賀インターナショナルバルーンフェスタ HP <http://www.sibf.jp/index.php> を参照。

佐賀県佐賀市で開催される「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」は、観客動員数約 80 万人を越える佐賀最大の観光イベントである。本章では、熱気球が文化となった佐賀県佐賀市の事例をみていくこととする。

第1節 佐賀インターナショナルバルーンフェスタの概要

佐賀インターナショナルバルーンフェスタは、佐賀市の嘉瀬川河川敷で毎年 11 月初旬 5 日間を使い開催され、日本だけではなく世界中から選手が集まり、参加機数 100 機を越えるアジア最大の熱気球イベントである。佐賀インターナショナルバルーンフェスタは、よりレベルの高い競技運営を通して、誰もが楽しめ、集まった観客にドラマティックな感動を与えると共に、熱気球をはじめスカイスポーツの存在を広く知らしめる事を目的として開催している。今年で大会 28 回目の開催であり、毎年 60～90 万人もの観客を動員する佐賀最大の観光イベントであり、秋の佐賀の風物詩ともなっている。

始まりは、1987 年福岡県甘木市を中心に開かれた「バルーンフェスタ in 九州」という小さなバルーンミーティングであった。当初は熱気球愛好者のための世界一流の競技大会を目指すというコンセプトのもとにスタートした。1980 年からは、会場を佐賀平野に移し、佐賀の熱気球大会がスタートし、1984 年からはアジアで初めての国際大会を開催し、「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」と改め、現在に至っている。

1990 年からは本田技研工業がスポンサーを務め、1993 年からは日本各地で開催される「ジャパンホンダグランプリ」の一戦としても開催されている。1989 年と 1997 年には「熱気球世界選手権」を開催し、1997 年の大会では 38 ヶ国・地域から世界選手権競技気球 112 機、その他の参加気球もあわせて 170 機もの熱気球参加し、佐賀の空を埋め尽くした。佐賀インターナショナルバルーンフェスタは、二度の世界選手権を成功させた実績を持ち、世界的にも認知された大会に成長した。

同時に、航空スポーツの振興のほかに国際交流や観光扶養、官民一体となつての街おこし、ボランティアの育成、地域文化の育成、子供たちの情操教育など様々な付加価値を持つようになっていた。

そのため会場の体制や期間中実施される様々なイベントに関して、バルーンリストの為だけでなく、一般市民はもとより精神的身体的なハンディを持つ人々や子供たちも楽しみ、体験できる場を提供している。

競技の質の高さだけではなく、観客サービスの質の向上に努め、たこやえびす様などの形をしたスペシャル・シェイプド・バルーンという変形気球を使って行うバルーンファンタジアや夜間係留（ラ・モンゴルフィエ・ノクチューン）、また子供達のためのキッズデー、体に障害を持つ人々を対象としたハートフルデー、熱気球教室など、幅広い人々に楽しんで

もらえるイベントとなっている。また、熱気球だけでなく様々なスカイスポーツを集めた多彩なイベントとなっている。

佐賀で初めて開催された1980年当初は3万人の観客であったが、確実にファンを広げ、9年後の1989年に開催された世界選手権では117万人もの観客動員数があった。その翌年からはほぼ毎年約80万人もの観客動員数がある。

この大会の運営は、主に気球愛好者で組織するボランティア団体である佐賀バルーンフェスタ組織委員会、さらに期間中2,000人ものボランティアに支えられ行われている。バルーンニストを含め約6,500人もの人々が参加し、今では世界中から注目される熱気球国際大会に成長し、2005年には「バルーンフェスタ」累計来場者数が1500万人を突破するなど佐賀大会の規模の大きさが伺える。また2,000人もの市民ボランティアが参画する市民参加型イベントということで、運営ノウハウが高く評価され、地域振興運動のモデルとして多くの表彰歴がある。

佐賀インターナショナルバルーンフェスタは、アジア最大の熱気球イベントであるとともに、市民参加の地域に根付いたイベントである。官民そして地元企業なくては成り立たないものである。ここまで多くの人々から賛同を得、成功してきた背景はどこにあるのだろうか。次に2006年事業実績報告からどのような事業がおこなわれているかをみていこうと思う。

第2節 2006年事業実績報告より

まず2006年事業実績報告から佐賀インターナショナルバルーンフェスタがどのような形で行われてきたのかを見ていこうと思う。

2006佐賀インターナショナルバルーンフェスタの大会概要は、「第22回パシフィック・カップ」、「第23回熱気球日本選手権」、「2006熱気球ジャパンホンダグランプリ最終戦」、「2006SAGAバルーンマスターズカップ」、「バルーンファンタジア2006」であり、5つの大会・イベントが開催された。開催期間は平成18年10月30日から6日までの8日間で、競技は11月1日から5日の5日間であった。毎年10月末から11月はじめの一週間ほど開催されている。参加機数は14カ国114機である。観客動員数は、11月1日から5日の競技開催の5日間で877,000人であり、1日の観客動員数では4日（土）の232,000人が最高である。参加機数、観客動員数ともに日本で開催されている熱気球大会の中では一番多い。主催は佐賀バルーンフェスタ組織委員会であり、この組織委員会は熱気球関係者から成るボランティア組織である。

大会会場では競技のほかにイベントなどが行われ、来場した人々は競技以外に熱気球に関するイベントやスポーツ、キャラクターショーやバンドライブなどステージ上で行われる出し物、佐賀の物産展などさまざまなイベントを楽しむことができる。

熱気球に関するイベントは、4、5日に行われた夜間係留「ラ・モンゴルフィエ・ノクチュ

ーン」、バルーンファンタジア、係留体験搭乗、キッズデー、ハートフルデーがある。夜間係留「ラ・モンゴルフィエ・ノクチューン」は、4、5日の2日間行われ、合計116機が参加し行われた。バルーンファンタジアは、シェイプド・バルーンというアニメの人気キャラクターや動物の形をした熱気球が登場し、気象・風速などの条件が良い場合に、普段入ることができない競技エリアへ入ることができるというものであり、4カ国から9機の参加があった（図表2-2）。さらに1日にハートフルデー、2日にキッズデーを設け、それぞれ約600名、約6000人が参加した。

ハートフルデーは障害のある人々を招待し、バルーンの体験搭乗や球皮内体験に参加し、バルーンを身近に体験してもらうというものであり、会場には専用の観覧席や駐車場を設けている。2006年までは特定の日を設け実施していたが、より多くの障害者の人たちにバルーンを体験してもらうために2007年以降は特定の日を設けないこととなった。キッズデーは子供たちを対象とし、バルーンに触れたり、球皮内体験や熱気球教室を通して楽しく熱気球を学ぶことができるというものである。家族単位の参加だけでなく、幼稚園・保育園などの団体での参加も多い。係留体験搭乗は、競技・天候に実施するか否かが左右されるため実施日は決められていなく、昨年は1日と3日の2日間実施され、計616名が体験搭乗に参加した。

熱気球に関するイベントのほかに、スポーツを通じた地域振興などを目的とする競輪補助事業として「スポーツ&レジャーフェスティバル」が行われている。開催期間は11月2日から5日までの4日間である。ニュースポーツチャレンジコーナー、サッカーパーク、キッズテニス、スカイスポーツデモ、トライアルバイク、気球教室の6種のイベントが行われている。

図表2-2 バルーンファンタジア



資料：2007 佐賀インターナショナルバルーンフェスタ「バルーンファンタジア」

<http://www.sibf.jp/fiesta/fantasia/detail.php>

ニュースポーツチャレンジコーナーはフライングディスクやグランドゴルフ、ペタンク、アトラックゲームなどを体験するコーナーである。サッカーパークはJ2サガン鳥栖の協力で行われ、サガン鳥栖の選手とサッカー対決をするものである。キッズテニスは初心者でも楽しくテニスを体験できるコーナーである。スカイスポーツデモではスカイダイブやパワードパラグライダー、スポーツカイトのデモンストレーションを実施した。トライアルバイクは、4、5日の2日間6回実施され、世界の一流ライダーが、障害物をクリアしていくなど

高度なテクニックを披露した。気球教室は1日から5日の5日間実施され、実際にバルーンを触りながらパイロットと共に熱気球を立ち上げ、そのあとの片付けまでを行うもので、熱気球の仕組みや特性などの説明を実際に触れながら学べるというものである。また教室のほかにバーナー体験と膨らました球皮の中に入るという球皮内体験も実施された。

また憩いの広場ではバルーンモールとイベントステージが設けられている。バルーンモールは、100 mの大型テント内に佐賀うまかもん市場やふるさと物産展、農林水産まつり、くつろぎ広場、インポートフェア等が開催され、競技が開催されない昼間なども買い物や休憩ができるようになっている。イベントステージは、毎日日替わりで地元出身のミュージシャンや佐賀にゆかりのあるスペシャルゲストなどによるショーやライブが行われ、家族で楽しめるイベントが行われている。

大会開催中は、市内に設けられた無料駐車場から会場までをシャトルバスが運行し、さらには会場付近に臨時駅「JR バルーン佐賀駅」が設置されるなど会場にアクセスしやすくなっている。市内無料駐車場は、市内の小学校のグラウンドや運動公園など5ヵ所に設けられ、そこからシャトルバスが会場まで運行している。バスの運賃は距離に応じて大人運賃 200 円と 250 円となっている。2006 年のシャトルバス運行日は3日から5日の休日3日間の運行で、輸送人員は48,000名である。前年は23,894人であり、大幅に輸送人員は増えていることがわかる。

さらに佐賀市内で大会と同時に開催されているサテライト会場や有料の協賛駐車場（1回最大400円）と会場を結ぶ無料シャトルバスも運行されており、佐賀市内の観光もできるようになっている。無料シャトルバスの利用者は10,195人であり、前年の4,775人に比べ、利用者が増加している。また臨時駅「JR バルーン佐賀駅」は1989年の佐賀熱気球世界選手権から設置されているもので、2007年で19年連続の設置である。この臨時駅は佐賀市職員が佐賀の駅長室に1週間通いつめて実現したものであり、市職員の大会への思いが伝わるものでもある⁶。バルーンフェスタ期間中設置され、多くの利用者に利用されている。2006年の「JR バルーン佐賀駅」乗降客数は、5日間の合計で157,854人に上る。

佐賀市内では、バルーンフェスタ期間中サテライト会場として街なかでもイベントを行っている。街なかの展開としては、佐賀城下秋の骨董市や陶磁の里有田陶器市などである。それぞれ3～5日に行われ、佐賀城下秋の骨董市では約49,856人、陶磁の里有田陶器市では約11,774人が会場に足を運んだ。

バルーンフェスティバルの情報提供に関しては、ポスターが4,500枚、パンフレットは事前広報用パンフレットを37万部、当日用ジャバラパンフレットを20万部提供した。またインターネットでも情報提供をしており、佐賀市のホームページと佐賀バルーンフェスタ組織委員会ホームページに掲載し、組織委員会ホームページにはヒット件数10,56万6,066件あった。佐賀バルーンフェスタ組織委員会ホームページには、大会内容や熱気球に関する情報、

⁶ NPO 法人熱気球運営機構（Air-B）HP「About Air-B」http://www.air-b.com/airb_new/about/column/column0403_01.html より引用。

佐賀バルーンフェスタの歴史などの情報の他、駐車場の混雑情報やニュース・競技イベント開催速報などが随時掲載され、リアルタイムに大会情報を知ることが出来る。さらにテレビ、新聞、雑誌、情報誌にも情報提供を行った。駅前の大型ビジョンのスポット放映を行い、博多駅・小倉駅・長崎駅前で行った。

大会期間中にバルーンフェスタ会場、街なかサテライト会場でそれぞれ聴き取り方式のアンケートを実施しており、全1,434件のアンケート結果を収集した。それによると佐賀県内からの来場者が全体の52.2%、佐賀県以外の九州地方からの来場者は全体の48%、関東、関西からの来場者はそれぞれ1.0、0.8%であった。構成比を基にし、換算すると関東地方からは約9千人、関西地方から約7千人もの来場があった。それに伴う宿泊費や交通機関利用費など含め経済波及効果は、バルーンフェスタ会場で71億1700万円、街なかサテライト会場で5億3600万円であり、合計で76億5300万円となった⁷。

今までみてきたように佐賀インターナショナルバルーンフェスティバルは、規模が大きく、熱気球の競技だけでなく佐賀の魅力を伝える観光イベントとなっていることがわかった。子供から大人まで楽しめるイベントを組み合わせ、多くの人に参加し楽しめるイベントである。また佐賀県内からだけでなく、九州、関西そして関東からも観客が会場に訪れている。これは、認知度の高さと今までの活動の成果であるだろう。

大会事業内容を見た上で、次項ではここまで大きな大会へと成長してきた背景を探っていこうと思う。

第3節 成長してきた背景⁸

佐賀インターナショナルバルーンフェスタは、1987年の甘木市のバルーンミーティングから数え、今年で30回目を迎える。現在では毎年100機以上の熱気球の参加、60~90万人もの観客動員数を誇る大イベントに成長した。この成長の背景には何があるのだろうか。

まず佐賀は九州2大観光地である福岡、長崎にはさまれており、観光として不利な場所にある。そこに熱気球という新しく個性的なものを取り入れたからこそ、ここまで発展してきた。

そして熱気球そのものの持つイメージにより子供からお年寄りまで多くの人々に受け入れられ、文化となっていった。熱気球の持つイメージの特性として、間近で感じる圧倒的なスケールの大きさと迫力、カラフルな明るさ、メルヘンチックな浮遊感、大空いっぱい広がるおおらかさなどが挙げられる。熱気球には、このような他のスカイスポーツには無い子

⁷ 佐賀市提供資料「2006 佐賀インターナショナルバルーンフェスタにおける経済波及効果測定調査」参照。

⁸ 2007 佐賀インターナショナルバルーンフェスタ HP

「佐賀インターナショナルバルーンフェスタへの協賛について」<http://www.sibf.jp/about/ads/sponsor.php>、
「佐賀バルーンフェスタ組織委員会」<http://www.sibf.jp/about/organization/detail.php>、

佐賀大学熱気球部下ノ原氏インタビュー（07.10.11）よりまとめた。

供から大人の心を捉えて離さない魅力があるのである。またスカイスポーツの中では安全性が高く、デザイン性の自由さから、マスコミや印刷物の対象となるケースも多く、TV等の映像にも適した素材でもあるため、協賛企業も集まりやすく、ここまで成長してきた要因の一つと言えるだろう。

つぎに、地域の官民とバルーンリストが一体となって作り上げる運営課程が挙げられる。2,000名の市民ボランティアが集まり、市民参加型のイベントとしての運営システムの完成度の高さはすばらしいものである（図表2-3）。多くの市民が参加することにより、広報や大会運営のノウハウが地域に根付いているのだ。直接の大会運営はもちろんのこと、会場の清掃や通訳、外国人選手のホームステイの受け入れなどあらゆる面で市民ボランティアが携わっており、ボランティアなしでの大会は成り立たないのである。

また地元大学である佐賀大学の学生によるボランティア参加もあり、若いうちから大会組織に関わっているのである。佐賀大学の熱気球サークルが大会に参加しており、主に競技スタッフとして気象観測・計測・オブザーバー⁹・デブリファーマ¹⁰などを行っている。

そして大会競技を主管する「佐賀バルーンフェスタ組織委員会」は熱気球関係者のボランティアで構成されており、熱気球競技をスカイスポーツとして位置付け、これを拡大しつつ、よりハイレベルでかつ安全な運営活動を行うことを目指し、大会の運営を行っている。「佐賀バルーンフェスタ組織委員会」は、事務所を佐賀市内に常設しており、そのことから佐賀のバルーンフェスタにおける情熱を感じる。

さらに、大会にかかる周辺整備やイベント等を運営している「熱気球大会佐賀運営委員会」は、自治体、協賛企業、大会関係機関、各種団体により構成されており、バルーン大会を佐賀最大の観光資源とするだけでなく、ボランティア活動や国際交流活動、さらに地域の商工業の振興・発展の場と位置付け、さまざまな事業を展開しながらバルーン大会をサポートしている。

地域にこのような組織があり、運営のノウハウが根付いていることはすばらしいことである。このように多くの市民ボランティアの参加、地元大学の学生によるボランティア、連携のとれた両委員会による大会運営により、ここまで大きな大会・イベントへと発展してきたと考えられる。

佐賀という地で行われたという点、子供から大人まで引きつけてしまう熱気球の魅力、そして官民、企業、バルーンリストが一体となって作り上げる運営課程のすばらしさにより佐賀インターナショナルバルーンフェスタは佐賀一の観光イベントへと成長してきたのである。

図表2-3 市民ボランティア

⁹ 競技観察員のこと。各チームに同行し、飛行に関わる場所、時間、距離などの詳細を公平な立場で記録し、競技規定や航空法に対する明らかな違反などがあった場合に報告をする。

¹⁰ オブザーバーから観察・記録してきた報告を聞き、採点者に伝える役割を行う人。



オフィシャルクルー



計測班

資料：2007 佐賀インターナショナルバルーンフェスタ「写真
<http://www.sibf.jp/about/photograph/>

第4節 今後の展開

今まで見てきたように佐賀インターナショナルバルーンフェスタは、アジア最大級の熱気球イベントであり、参加機数、観客動員数ともに一番の規模を誇るイベントへと成長してきた。

そこまでのイベントへと成長してきた背景には、競技を観戦するだけではなく、熱気球の体験搭乗や球皮内体験、熱気球教室など観客参加型のイベントを織り交ぜてきたことが挙げられる。さらには熱気球のみならず、地元のサッカーチームの協力によるサッカーのイベント、その他テニスやスカイスポーツなど家族で楽しめるスポーツイベントを開催してきたことも挙げられるであろう。そして会場内にはイベントステージや大型テントによる物産展等の開催をし、多くの人々が楽しめるよう工夫がなされている。

会場までのシャトルバスやまちなか巡回バスの運行、臨時駅「JR バルーン佐賀駅」の設置など、会場作りのみならず会場へのアクセス面にも力を入れているため、関西、関東地方からも多くの観客が訪れるのであろう。

このようにイベント内容、会場作りや会場整備もさることながら、この大会を支えている官民一体となった運営組織はすばらしいものである。約2,000人もから成る運営組織は、市民ボランティアから成り立っており、まさに市民が作り上げているイベントなのである。地域の人々が運営をすることにより運営のノウハウが地域に根付き、地域の財産となっているのだ。これはこれからも永続的に受け継がれ、佐賀市の強みとなっていくだろう。

約30年間多くの市民から賛同を得ながらイベントを開催してきたが、課題はないのだろうか。

まず運営面での課題としては、毎年このイベントに対しての予算が減っており、その限られた予算の中で観客の喜ぶイベントをつくってはいけないということが挙げられる。毎年来る観客が楽しめるイベントにしていかなければならないのである。

つぎに佐賀市内への宿泊客が少ないことも課題である。観光客は、昼間バルーンフェスタを見たあとに、佐賀県内あるいは他県の温泉地へ宿泊することが多く、宿泊費が佐賀市へ落ちないため、佐賀市の経済利益とはならないのである。

このように大きなイベントであっても課題はあり、これからはその課題について対策をとらなくてはならない。栃木大会においてもこの課題は無視できるものではないであろう。佐賀の会場作り等を参考にするとともにこのような問題点も視野に入れ、イベントを作っていくなくてはならない。

第3章 子供たちに感動をー長野県佐久市ー

長野県佐久市では、「佐久バルーンフェスティバル」が開催されている。この大会は地域の人々による運営がなされ、地域で盛り上げ、作り上げられているものだ。本章では地域活性化ともなっている「佐久バルーンフェスティバル」の事例を取り上げる。

第1節 佐久バルーンフェスティバルの概要¹¹

佐久バルーンフェスティバルは、長野県佐久市で毎年5月の連休の3日間を利用して開催されており、今年で15回目の開催となる。1993年3月、上信越自動車道佐久IC―藤岡IC間の開通による高速交通時代を控えて、佐久の晴天率の高さ、広い平坦地を活用した観光イベントとして熱気球ジャパンホンダグランプリを誘致したのが始まりである。当初は、長野オリンピックを意識し2月に開催されていたが、第3回目の1995年からはゴールデンウィークに開催されている。

当初から地元の実行委員会により全国から集まる選手の接待（当時は豚汁）や、観戦者向けのイベントを実施した。以降、毎年「熱気球ジャパンホンダグランプリ」の一戦として開催している。佐久平の自然環境を活用した熱気球大会を開催することにより、佐久市及びその周辺地域の観光、産業、文化等のより一層の活性化を促進し、熱気球そしてスカイスポーツ全体の普及、振興に貢献することを目的としている。また「子供たちに感動を」というテーマの下、キッズデーを設け、子供たちが喜ぶような多くのイベントを実施している。佐久の大会へ行って驚いたことは、朝6時など早い時間帯から競技を見に多くの子供たちが会場に訪れていることである。

2月に開催されていた第1回目の1993年、第2回目の1994年は、観客動員数は6万、3万と少ないが、開催時期を4月29日～5月1日のゴールデンウィークに移して行われた第3回目の1995年は、観客動員数が10万5千人と一気に増加している。それ以後、ゴールデンウィークに開催しており観客動員数も増加している。第13回目の2005年には20万人を越え、2007年には27万人もの動員数があった。

第2節 2007年事業報告書より¹²

佐久バルーンフェスティバルは、「2007熱気球ホンダグランプリ第2戦 第15回大会佐久バルーンフェスティバル2007」として5月3日から5日まで、佐久市千曲川スポーツ交流広場で開催された。主催は地元の人々から成る佐久バルーンフェスティバル組織委員会である。特別協賛は本田技研工業株式会社、協賛企業は、パイオニア株式会社と地元企業等186

¹¹ 佐久市役所観光課観光係中原氏インタビュー（07.7.19）および提供資料「佐久バルーンフェスティバル開催経過」より参照。

¹² 佐久市役所観光課観光係中原氏インタビュー（07.7.19）および提供資料「佐久バルーンフェスティバル2007〈実施概要〉」、「佐久バルーンフェスティバル2007事業報告書」を参照。

社である。参加気球は、競技以外の係留などを含め 47 機、大会の運営スタッフや競技関係者数約 1,100 名にも上る大変規模の大きな大会である。

大会会場では、熱気球以外のイベントも併せて行われている。そのイベント協力には、佐久漁業協同組合、佐久凧保存会、岸野郵便局、佐久物産振興会、佐久薬草研究会、小諸フライングクラブ、日本ブーメラン協会、長野スカイスポーツカイト FC、佐久市スポーツ少年団、マレットゴルフ連盟佐久支部、佐久市生活改善グループ連絡協議会、唐松会、バルーンサークル大きな夢、佐久熱気球クラブの 14 団体が協力している。また今年は 15 周年記念として横綱朝青龍関を呼びイベントを行った。

イベント内容は、じゃんけん大会、クイズ大会、写真撮影、相撲甚句披露、横綱による係留体験搭乗を行い、子供約 100 名に横綱色紙をプレゼントした。その他のイベント内容は、熱気球の係留、熱気球教室、バルーンイリュージョン（夜間係留）・花火、ホンダトライアルデモンストレーション、佐久凧展示、凧揚げ、子供凧作り教室、ラジコン飛行実演、紙ブーメラン作り教室、カイト作り教室、バルーンアート教室、釣り体験、魚のつかみ取り体験、魚の炭火焼体験・試食、木工教室、そば打ち体験、竹馬教室、地酒試飲会、餅つき体験・試食、薬草茶無料サービス、ターゲットナイン、フワフワバッテリーカー、アドバルーン係留、子供たちによる写生大会、マレットゴルフ大会、ホンダ車の展示、写真コンテスト入賞作品の展示、モンゴル国建国 800 年記念親善訪問写真展、風林火山関係イベント、環境イベント、佐久市内の小中学校の児童生徒による応援メッセージの展示など各団体それぞれの特徴を出したイベントを行った。またステージイベントとして保育園児による踊りや吹奏楽による演奏、太鼓の演奏など 18 団体によるパフォーマンスを行った。

期間中は、長野新幹線佐久平駅浅間口とフェスティバル会場間を無料のシャトルバスが運行しており、利用者は昨年が 632 名、今年は 958 名であり、利用者が増加している。また市内観光周遊バスを期間中全 4 コース運行させており、市内の観光名所をまわり佐久市の魅力を伝えている。利用者は計 104 名である。

また協賛クーポン券を発行しており、協賛している店や施設の割引券を協賛クーポンマップと一緒に配布し、佐久市の観光のきっかけとしている。

イベントとは別にメイン会場には飲食店も出店している。これは、広報で公募しており、商店街に加盟しているなど一定の基準を満たした店が出店料を払い、出店している。応募が多いこともあり、今年は出店数を増やして行われた。出店用テントは、出店側の持ち込みとし、販売商品で保健所の営業許可が必要なものは出店者側が手続きを行った。出店者は昨年より 4 店舗多い 19 店舗であった。

報道・広報関係は、地元局や NHK など 6 社のテレビによる開催案内やニュース報道が行われ、ラジオ 2 社による実況中継も行われた。また地元や全国版の新聞社、雑誌 28 社による開催案内及び取材記事が行われた。

このように佐久バルーンフェスティバルは、競技だけでなく、多くの地元団体の協力によるイベントを行い、盛大なフェスティバルとなっていることがわかった。また観客も関東地

方からの来場者が全体の 29.2%、中部地方からの来場者が 5.1%と 3 割強の人々が長野県以外から訪れており、他地域への浸透率の高さがうかがえる。また長野県内で佐久市以外からの来場者は 35.5%で佐久市以外にもこのバルーンフェスティバルが浸透していることがわかる¹³。

今年は佐久バルーンフェスティバルに実際にボランティアスタッフとして参加したが、栃木県から来たという家族連れに会い、話を聞いたところ、毎年ゴールデンウィークは佐久バルーンフェスティバルへ来ているとのことだった。このように県外から毎年佐久へ訪れ、観光していくということは、これまで 15 年間に及ぶ佐久バルーンフェスティバル開催の成果であろう。

第 3 節 地域全体で取り組む街づくり¹⁴

前述したように佐久バルーンフェスティバルは、地元の人々の協力によりイベントを行い、大会を運営している。佐久市における大会運営の組織や街づくりについてみていこうと思う。まず佐久バルーンフェスティバルは実行委員会と組織委員会の二つの委員会から成っており、構成員はどちらも地元の人（主にボランティア）である。組織委員会は大会の運営に携わっていて、事務局を市役所の中に設置しており、市役所の役割は事務的なサポートを行うことである。実行委員会は、それぞれの区長会や役員から構成されており、運営のサポートを行っている。

大会の経費は、1 回の大会に総額で約 1500 万円かかるが、それは主に地元企業からまかなっており、ゲームの商品やイベントなどでバックアップをしてもらっている。協賛企業を募る仕事は組織委員会で行っている。この大会の経済効果は、同時期に開催されるこいまつりと合わせて 5 億 4 千万円となっている。

街づくりに関しては、大会第 1 回目の時からすでに街づくりを考えていたそうだ。熱気球によって街づくりを行うのではなく、熱気球が佐久という町を知るきっかけとなればという考え方で始めたものである。熱気球は着陸地として空き地や田畑を利用するため、最初は市民の方の熱気球に対する理解が得られず、熱気球を嫌がる人も少なからずいた。そこで市民の理解を得るために、佐久市で活動していた熱気球クラブの人々が学校や団体に熱気球教室や体験搭乗などを行うことで徐々に理解を得てきた。また、2006 年近隣の町村と合併を行い、合併した町村の方々から理解を得るために、2007 年の大会の際にそれぞれの小学校に熱気球大会応援旗を作ってもらいなどし、より多くの市民の方々から理解を得て、大会を全体で盛り上げていくよう活動している。佐久バルーンフェスティバルのコンセプトは、「子

¹³ 2006 年のデータ。NPO 法人熱気球運営機構（Air-B）会長町田氏提供資料「佐久バルーンフェスティバル 2006 会場アンケート結果」より。

¹⁴ 佐久市役所観光課観光係中原氏、佐久バルーンフェスティバル常任組織委員中沢氏インタビュー（07.7.19）および提供資料よりまとめた。

供たちに感動を」であり、子供たちに喜んでもらい、感動してもらう大会を目指している。

次に地域の人々の協力により大会が成り立っている佐久バルーンフェスティバルであるが、地域の人々がどのように関わってきたかをみていく。

当時佐久商工会議所青年部がこの大会に関わるきっかけは、市長からの熱気球大会の手伝いの要請であった。当時、青年部では岩村田地区のこんこんまつり、中込地区の七夕まつり、野沢地区のぎんぎんまつりを盛り上げるため参加していた。しかし各まつりがマンネリ化し始めていたため、マンネリ化を脱するために新しいイベントとして熱気球の大会にボランティアとして参加することとなった。当時は、毎年5月4日に行われているこいまつりとマラソンを超えるイベントにしようとはか考えていなかった。青年部としての大会の活動は、大会1、2年目は下働きが主であったが、大会3年目には、組織化され、消防の手配や炊き出しの手配などをするなど大きくなっていった。

さらに町田氏の講演や市長とのつきあい、会社の広告として利用できるという面から熱気球部会を立ち上げ、各学校や団体にイベント係留や気球に乗ってサンタがプレゼントを配るというサンタイベント、熱気球教室などを行い、地域に熱気球を広めていった。市からも熱気球2機を貸与され、大会やイベントでは佐久市の広告媒体となり、市の財産となっている。地域の賛同者の活動により、今ではホンダグランプリ開催地において協賛企業が佐賀の大会について2番目に多くなった。

また大会のボランティアスタッフはほとんどが佐久市民から成っており、佐久市全体で取り組んでいるイベントであることがわかる。佐久バルーンフェスティバルに参加しているボランティア、協賛企業それぞれが、いかに佐久バルーンフェスティバルを盛り上げ、来場者に楽しんでもらうかを考えて作り上げているイベントであると思う。

地元の人々から成る組織委員会、実行委員会、そして地域の人々から成る多くのボランティアに支えられ、佐久バルーンフェスティバルは大きくなってきたことがわかった。

第4節 今後の課題¹⁵

今年で15周年を迎え、佐久一のイベントとなった佐久バルーンフェスティバルであるが、マンネリ化が課題として挙げられる。イベントをやるには、「資金・人材・情熱」がキーとなるが、イベントを長くやるにつれて情熱が薄れてきているのである。ボランティアスタッフはほとんど佐久市民であるが、その人たちが組織の中核部に入っていないのが現状だ。

今後の課題としては、ボランティアの確保が挙げられる。さらに組織委員会を作り上げた人と継承している人たちではやはり方向性も違ってくるため、マンネリ化が生じやすい。そのためには、イベントの内容を変えるなど、だんだんとやり方を変えていかなければならな

¹⁵ 前掲 脚注21参照。

い。何よりも毎年大会を楽しみに来る人がいるということを考えて、イベント作りをしていかなければならない。

第4章 中部地方で初めて開催された大会ー三重県鈴鹿市ー

三重県鈴鹿市では「鈴鹿バルーンフェスティバル」として熱気球ホンダグランプリの第3戦が開催される。佐賀インターナショナルバルーンフェスタや佐久バルーンフェスタと比較すると規模は小さいが、まちづくりとして地域の人々が主催組織をつくり、運営している大会である。本章では、三重県鈴鹿市の事例を取り上げ、他市と比較していく。

第1節 鈴鹿バルーンフェスティバルの概要¹⁶

¹⁶ 鈴鹿市役所提供資料「鈴鹿バルーンフェスティバルの概要」を参照。

鈴鹿バルーンフェスティバルは、熱気球ホンダグランプリ第3戦として三重県鈴鹿市の鈴鹿川河川敷と鈴鹿サーキットを会場とし9月の中旬に開催されており、今年で16回目を迎える。1992年の鈴鹿市制50周年を機に開催され、中部地方では初めての熱気球大会であった。鈴鹿バルーンフェスティバルの特徴は都市型の大会であり、自然環境と都市がバランスよく調和している場所での大会ということである。

開催目的としては、気球を通して多くの人々に感動を与えること、子供たちに自然を感じるきっかけをつくること、三重県鈴鹿市を代表するイベントに育てることの3点が挙げられる。

秋の鈴鹿市の新しい恒例行事として定着しており、F1グランプリおよび8時間耐久ロードレースと同様に鈴鹿市の観光のメインイベントとなるよう目指している。また狭いエリアであり、さらに複雑なロケーションの中での競技であるため、選手の飛行技術の向上と学生の熱気球愛好者に競技のノウハウ習得の場を提供している。さらには、熱気球が縁となりタンザニア連合共和国の駐日特命全権大使が訪れ、三重県庁、鈴鹿市役所を表敬訪問するなど、熱気球を通じての国際交流をこれからも行う予定である。

鈴鹿バルーンフェスティバルの経緯としては、まず1992年に第1回大会として鈴鹿川河川敷で開催された。翌年の1995年からは熱気球ジャパンホンダグランプリが同時開催され、鈴鹿サーキットが第2会場として開催された。観客動員数は第1回大会で19,500人であり、回を重ねるごとに増加し、第5回大会には70,000人に増加していた。しかしその後65,000人、34,000人と減少し、第9回大会では20,000人となっていた。

そこで観客動員数の伸び悩みの対策として2001年の第10回大会からは、鈴鹿サーキットをメイン会場とし、河川敷では市民を対象とした熱気球の体験搭乗を無料で行った。その後着々と観客動員数は伸び、2004、2005年には10万人以上の来場があった。2003年に「鈴鹿バルーンフェスティバル実行委員会」を立ち上げ、さらにイベント会場の運営、広報、観客対策等を幅広く支援する「鈴鹿バルーンフェスティバル組織委員会」を設立し、運営組織を確立させた。また日本選手権を誘致し、盛大に大会が行われ、地元大学の鈴鹿国際大学に補助し、「ベルディ」や「鈴鹿市」名を入れたバルーンを作成するなど街づくりとして大きな動きを見せている。さらに熱気球ジャパンホンダグランプリ開催の5つの都市の代表者が集まり「バルーンを生かしたまちづくり」の実態や課題などを話し合う「バルーンサミット」も行われ、2003年は鈴鹿バルーンフェスティバルにとって大きな転換期であったであろう。2004年はサーキット会場での競技は行わず、河川敷会場で競技、バルーンイリュージョンを行った。

鈴鹿バルーンフェスティバルは、今年で16回目を迎え、佐久バルーンフェスティバルとほぼ同じ年数が経つ。実際に2つの大会へ行ってみたが、鈴鹿バルーンフェスティバルのほうが活気がなかったように思われる。この2つの大会の違いはどこから来るものだろうか。次項では鈴鹿バルーンフェスティバル2007の実施報告書からどのようなことが行われて

いるのかみていこうと思う。

第2節 2007年実施報告書より¹⁷

2007年9月15日から17日までの3日間にわたって開催され、会場となったのは、鈴鹿川河川敷（第1会場）と鈴鹿サーキット（第2会場）である。主催は鈴鹿バルーンフェスティバル実行委員会である。特別協賛は本田技研工業株式会社、協賛としては地元企業など6社である。佐久バルーンフェスティバルの場合、協賛企業は186社であり、大きく差が生じている。

参加気球は競技エントリーが32機、その他オフィシャル気球が8機である。オフィシャル気球とは、競技に参加せず、体験搭乗などに参加する気球のことである。合計40機もの参加があった。参加人数は、選手が240名、競技役員や運営役員、スタッフは160名であり、計400名が参加して行われた。

実施内容は、熱気球の競技飛行、熱気球体験搭乗（中学生以上500円）、熱気球教室、フォトコンテスト、ホバークラフトのデモ走行と展示、スケッチコンテストなどであり、その他に鈴鹿サーキット内でバルーンイリュージョンを行う予定だったが、雨天のため中止となった。河川敷での夜間係留は球皮を付けないバーナーバージョンで行った。今年はちょうど台風と重なり、3日間で2日は雨が降ったり、止んだりの天候であったため、思うように競技や体験搭乗が出来なかった。

しかし、河川敷のイベント会場では、バルーンミュージックフェスティバルや朝市、ふるまい鍋、飲食・物産テント、大ビンゴ大会、スケッチコンテスト2006入選作品の展示、鈴鹿川の生き物展、働くクルマ展示体験、ハンドクラフト教室、紙でつくる甲冑展示、寄せ植え教室・生産者による花等の販売、タンザニア交流イベントが行われた。イベントはほとんど河川敷の会場で行われ、体験搭乗と熱気球教室は鈴鹿サーキット内で行われた。

広報に関しては、TV放映、新聞、雑誌、ウェブサイト（7社）に掲載した。また7月初旬より三重県、鈴鹿市をはじめとした近隣市町村、近鉄各駅、高速道路のSA・PA、ホンダ販売店、地元の小売店舗にポスターを掲示し、周知を図った。また広報誌にチラシを折り込むなど、地元にも周知を図った。

観客動員数は、3日間で57,700人であり、河川敷では35,000人、鈴鹿サーキットでは22,700人であった。

今年はちょうど台風と重なってしまい、ほとんど競技や体験搭乗が出来なかった。そのため観客動員数も伸びず、少し活気がなくなってしまった。実際行ってみて感じたことは、イベント内容も佐賀市や佐久市と比べ数が少なく、寂しいような気がした。ボランティアスタッフの数も佐賀や佐久のバルーンフェスティバルは1,000人以上いたのに対し、鈴鹿バルーン

¹⁷ 鈴鹿市役所提供資料「鈴鹿バルーンフェスティバル2007実施報告書」参照。

ンフェスティバルは競技関係者を含め 400 人ほどであった。規模の大きさや観客動員数やボランティアスタッフなどからみて、多くの課題が残されていると思う。次項では、鈴鹿バルーンフェスティバルに関する行政の取り組みや地元大学の鈴鹿国際大学の取り組みを見ていき、地域の協力のあり方、今後の課題などを分析していく。

第3節 行政・地域・大学の働きとは¹⁸

鈴鹿バルーンフェスティバルも佐賀や佐久のバルーンフェスティバルと同様に市民組織によって運営されている。その中での行政、地域、大学の働きをみていこうと思う。

行政の取り組みとしては、大会開催の 1992 年の段階では補助金の交付のみであった。佐賀市や佐久市は当初から行政が積極的に街づくりとして働きかけていたが、鈴鹿市は街づくりとして行政が大きく乗り出してはいなかったのだ。その後 2001 年に佐賀市から、熱気球ホンダグランプリを開催している 5 市町での情報交換、相互交流、連携を図るためのバルーン都市交流会議の提案があり、毎年それぞれの市町が順に会場となり、バルーン都市交流会議が行われるようになった。2003 年は、鈴鹿市で会議が行われ、それと同時に鈴鹿市は日本選手権を招致した。それを機に大会の運営体制を整えるために「鈴鹿バルーンフェスティバル組織委員会」をリセットし、「鈴鹿バルーンフェスティバル実行委員会」を新たに立ち上げ、リスタートを切った。この鈴鹿バルーンフェスティバル実行委員会は事務局を朝日ガス（株）鈴鹿営業所内に設置した。

行政側の動きとしては、実行委員会とは別に市長をトップに市内の観光関連事業所の代表者を委員に迎え、イベント会場の運営や広報、観客対策等でバルーンフェスティバルを支援する「鈴鹿バルーンフェスティバル組織委員会」を結成し、深く行政も関わるようになった。ここ数年は、実行委員会の一員として行政職員も参画しており、鈴鹿バルーンフェスティバルを鈴鹿市の代表するイベントとして全面的に協力している。

大会を開催するごとにだんだんと行政側も力を入れてきたようだ。実行委員会や組織委員会も回数を重ねる毎に体制を整えてきたように感じる。

大会開催 16 回目を迎える鈴鹿バルーンフェスティバルだが、地域との関係はどうだろうか。熱気球の競技は着陸地点として田畑などを利用するため、地域の人々の協力がなければ開催できないものである。さらにバルーンフェスティバルは、地元のボランティアによって大会が運営され、競技に関するボランティアや体験搭乗や会場整備など運営に関するボランティアなど多くの方々の協力がなければ成り立たないのである。実際に鈴鹿バルーンフェスティバルでは、大会時のイベントは出来るだけ地元で活動しているグループや団体に参画してもらっている。

¹⁸ 鈴鹿市役所産業振興部商業観光課観光振興 G の坂氏へのインタビュー（07.9.15）および提供資料、鈴鹿国際大学熱気球部顧問清水氏インタビュー（07.12.7）よりまとめた。

市内の小学校に競技参加チームへの応援旗を描いてもらい、その後も交流を深めてもらうなど、地域ぐるみで大会に関わっている。しかし、地権者の協力などはまだまだ充分とはいえないのが現状である。また熱気球に対する認識が低いという現状もあり、これからも多くの地域の人々へ認識を深めていくような活動が必要だと思われる。

次に大学との関わりについてみていこうと思う。鈴鹿バルーンフェスティバルは、今までみてきた佐賀市や佐久市と違い、大学が大会運営に関わっているのが特徴である。佐賀市は地元大学の佐賀大学が関わっているが、競技のことに携わっており、運営のほうには携わっていなかった。佐久市は大学自体が参加していなく、地域と行政で盛り上げている大会である。

鈴鹿バルーンフェスティバルには、地元大学の鈴鹿国際大学が大会に関わっている。日本選手権を招致した 2003 年に鈴鹿市と鈴鹿国際大学とが共同で熱気球を作製した。行政側が他都市の市のネーム入り熱気球を見て、観光の活性化になると考え、作製するに至ったという。この熱気球は、鈴鹿市のマスコットキャラクターである「ベルディ」の絵柄と「鈴鹿市」、「鈴鹿国際大学」の文字を入れたデザインである。この熱気球は鈴鹿国際大学の熱気球部が所有しており、鈴鹿バルーンフェスティバルでボランティアとして係留やゲストフライトに参加している。さらに鈴鹿バルーンフェスティバルに参加するとともに他都市でのホンダグランプリの大会やイベントに参加し、鈴鹿バルーンフェスティバルの PR や鈴鹿市の PR として活躍している。地域貢献として大会に応援旗を書いてくれる小学校への熱気球教室もボランティアで鈴鹿国際大学熱気球部が中心となっていて行っている。2004 年からスタートし、2006 年までの 3 年間で約 14 校の小学校へ熱気球教室を行った。

大学の人材を活かし、さらに市の PR や地域貢献を行うという行政と大学の連携は、他都市にはない活動であり、すばらしいと思う。小学校やほかのイベントで熱気球の体験搭乗や熱気球教室を行うことで地域の熱気球に対する認識を高め、多くの指示を得られるであろう。また大学生が地域に出て、そのような活動をすることにより、授業では味わえない地域の人々とのコミュニケーションもでき、よい経験になるであろう。しかし、部員不足や熱気球の耐久年数の問題などまだ課題が残されている。

行政、地域、大学の働きを見てきて、行政の組織、地域の協力・理解、そして地元大学との連携がしっかり行えることが出来たなら、鈴鹿バルーンフェスティバルはさらに発展するであろう。今年で 16 回目の開催を迎えた鈴鹿バルーンフェスティバルだが、そのほかにも課題が挙げられる。次項でその課題についてまとめてみたいと思う。

第 4 節 今後の課題¹⁹

¹⁹ 鈴鹿市役所産業振興部商業観光課観光振興 G の坂氏へのインタビューおよび提供資料、鈴鹿国際大学熱気球部顧問清水氏インタビューよりまとめた。

鈴鹿バルーンフェスティバルに行ったが、今年は台風の影響で3日中1日しか競技が行えず、鈴鹿バルーンフェスティバルの本当の様子を見ることは出来なかった。鈴鹿バルーンフェスティバルは、9月の台風の時期に行われているため、ここ2年続けて天候不良に見舞われ、競技が思うように行えていない。まず、そのことから開催時期の見直しが迫られている。またこの時期は、市内の小学校（30校）の秋季運動会の時期でもあり、2003年には約8割弱の小学校の運動会と大会開催日が重複してしまった。その後は2004年に11校、2005年16校、2006年6校と運動会が重なっている。このことから観客動員数も伸び悩んでいると考えられる。

次に地域住民の協力、理解の課題が挙げられる。前述したように熱気球の競技は地域の人々の理解がなくては行えないものである。バルーンフェスティバルに関しても地域のボランティアが支えていかなくては成り立たないものである。よってこれからの鈴鹿バルーンフェスティバルの発展には、気球の着陸地となる農地の地権者、地域住民の理解と協力の拡大が必要である。

さらに地元団体等の参画を促進し、広報や協賛、イベントの協力を募り、バルーンフェスティバルを盛り上げていく必要がある。それとともにイベント会場の運営、広報、観客対策等を幅広く支援している組織委員会において、さらに多くの団体が参画し、協力する必要がある。

また地元チームの拡大も望まれている。地元では鈴鹿国際大学の熱気球部が「ベルディ号」を所有し、活動しているが、部員の減少が問題となっている。現在学生パイロットがいなく、唯一パイロット免許を持っている顧問がいなければ係留などができないという状況である。部員不足によりフライトの練習やパイロットの育成などの活動が充分に行えないのである。また熱気球の耐久年数の問題も出てきており、次の熱気球をどうするか、また気球活動をするための維持・管理のランニングコストの問題もある。部員不足のため、クラブの存続自体にも不安があるということだ。地元の社会人クラブも2チームほどあるが、どちらも人手不足で充分に活動が行えない状況である。そこで鈴鹿国際大学を中心とした市民チームの立ち上げが望まれている。有志が集まった市民チームによって、小学校などへの熱気球教室などの地域貢献が期待される。

今までみてきたように鈴鹿バルーンフェスティバルは、住民や地権者の理解、協力、大学や地元チームとの連携など多くの課題が残されている。一番大切な地域とのつながりをこれから強めていかなければならないであろう。

第5章 バルーンフェスタ i n 代々木の開催²⁰

バルーンフェスタ i n 代々木は、熱気球のふるさとである佐賀市が中心となり、第2戦開催地の長野県佐久市と第3戦開催地の三重県鈴鹿市が大会の告知イベントとして開催しているイベントである。熱気球に接する機会が少ない首都圏の人々を対象とし、本物のバルーンの大きさや魅力を体感してもらい熱気球ファンの拡大を図るとともに、来場者に対して各地の熱気球の大会や観光・商業・物産のPRを行なうことが目的である。場所は東京都の都立代々木公園「中央広場」で、2007年は8月25、26日と2日間にわたって行われた。このイベントは今年で5回目の開催である。

²⁰ 佐賀市役所提供資料「バルーンフェスタ i n 代々木 事業計画書」よりまとめた。

今年の実施内容は、バルーン体験搭乗と熱気球教室、夜間係留（ラ・モンゴルフィエ・ノクチューン）、観光物産PRブースの設置である。佐賀市、佐久市、鈴鹿市ではそれぞれ熱気球を持っており、体験搭乗や夜間係留ではそれぞれの熱気球を立ち上げ、各市のPRにもなっている。体験搭乗などの招待対象は、地元小学生、障害者の方々、マスコミ、エージェント、各関係者等約500名であり、当日来場した一般客に関しては、状況を見て対応した。実際2日間で約1,200人の方々に体験搭乗をしていただき、約12,000人ももの来場者があった。参加費はすべて無料で行われた。

2006年度は、同じく8月の第4土日に行われ、来場者数約11,000人、体験搭乗者数約1,000人、夜間係留観覧者数は約2,000人であった。取材実績は、テレビ7社（ケーブルテレビ2社含む）、新聞7社、出版社3社、海外メディア3社であり、広く告知が出来ているといえるだろう。

なかなか熱気球に触れる機会が少ない首都圏で開催することにより多くの人々が集まり、また多くの取材があり、大会はもとより観光物産のPRにもなっている。

熱気球大会佐賀運営委員会が主催となり、共催としてAir-B、長野県佐久市、三重県鈴鹿市、栃木県茂木町が行っているが、実際に行ってみて栃木県茂木町のPRはずいぶん少なかったように思える。栃木県茂木町以外の都市は、それぞれの都市名と都市を象徴する絵がプリントされた熱気球を持っており体験搭乗や夜間係留の際に立ち上げるため、よいPRとなっていた（図表5-1）。さらにそれぞれ観光物産や各地の大会の見所を紹介するブースがあるのに対し、栃木県のブースはなく、これでは告知にならないであろう。夜間係留のアナウンスの際に紹介される程度である。

多くの来場者や報道があるこのイベントで、栃木県ももっとPRするべきである。栃木県は唯一関東圏での大会が開催されるため、この首都圏での告知イベントで告知をすることで大いに首都圏からの来場が見込まれるだろう。今までは茂木町主催での大会であったが、これからは宇都宮市も大会に関わってくるため宇都宮市、茂木町ともに協力しPRしていかなければならない。

図表 5-1 各都市の熱気球

		
さがえびす（佐賀市）	信州清流号（佐久市）	ベルディ号（鈴鹿市）

写真：07.08.26 バルーンフェスタ in 代々木にて筆者撮影

第6章 とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの現状

今年から栃木県宇都宮市は熱気球ホンダグランプリの最終戦として開催された「とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップ」のメイン会場となっている。その他には芳賀町、茂木町などが会場となり、広域的に大会が開催された。2005年までは「MOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップ」という名称で大会が開催されてきたが、今年から名称が変更になり開催された。この背景や大会の概要についてみていくことにする。

第1節 とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップへの移行について

(1) MOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップについて

MOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップは熱気球ホンダグランプリ最終戦として1999年～2005年まで茂木町で開催されてきた。毎年11月後半の連休に開催されている。主にツインリンクが会場となり開催され、風向きによって芳賀町や真岡市、茨城県などまで会場となる。

MOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップは広い競技エリアを持ち、さらに海外からの選手も多く参加するグローバルな大会である。また茂木の山という特徴的な地形を飛行するため、佐賀市や佐久市などの平野とは違う競技ができ、ハイレベルな大会を行うことが出来るのである。

観客動員数は、最初は30,000人程であったが、徐々に人数を増やし、2003年には52,000人、2005年には60,000人と観客動員数を伸ばしてきた²¹。それとともに茂木町や周辺の会場となる市町での認知度も上がってきており、関東最大級の熱気球大会へと発展した。

このように定着してきた大会が、今年になり宇都宮市も加わりより広域的な大会へと変わった背景を次項でみていこうと思う。

(2) とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップへ移行した背景²²

とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップに移行した背景には、2006年に茂木町で開催された栃木熱気球世界選手権が挙げられる。

それまで茂木町で開催されてきた MOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップは、参加選手のレベルの高さや広いフライトエリアとさまざまな地形、実施競技数の多さなど、世界的にもハイレベルな大会としてその実績が評価され、世界選手権を開催するに至った。熱気球世界選手権は、世界各国で2年に一度開催され、今までに17回開催されており、海外、国内の選ばれた選手のみが参加を許されるレベルの高い競技である。日本での開催は1989年と1997年の佐賀県佐賀市での開催に次ぐ、3回目である。

²¹ 前掲 脚注10参照

²² 2006 栃木熱気球世界選手権 HP「熱気球世界選手権とは」http://www.air-b.com/airb_new/tochigi/02_01.htmlを参照。

栃木熱気球世界選手権は、2006年11月18日～26日の9日間にわたって行われた。参加国数31カ国、参加機数62機であり、9日間の観客動員数は10万人を越え、盛大に開催された。そのため今まで茂木町で11月後半に開催されてきた熱気球ホンダグランプリの最終戦は11月前半に佐賀市で開催され、それまで佐賀市で行っていた第4戦を「宇都宮バルーンフェスティバル2006」として10月に、宇都宮市を会場とし開催した。宇都宮市で熱気球の大会が開催されたのは、このときが初めてである。

またこの大会は熱気球世界選手権のプロローグイベントとしても開催された。宇都宮バルーンフェスティバルは2日間開催され、熱気球世界選手権の際も1日だけ宇都宮市で開催された。宇都宮バルーンフェスティバルの観客動員数は、2日間で15,000人、熱気球世界選手権の際の宇都宮会場の観客動員数は1日で25,000人であった²³。

このように宇都宮市の会場に多くの人々が足を運び、大変賑わった。昨年の実績と宇都宮市の人口の多さや交通の便の良さなどから、今年は宇都宮市をメイン会場とし、茂木町、芳賀町など広域的な大会として「とちぎ熱気球インターナショナルバルーンフェスティバル」が開催されることに至った。

第2節 2007 とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの概要²⁴

実際に今年、宇都宮市をメイン会場として開催された「とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップ」について具体的にどのようなことが行われたかをみていこうと思う。

とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップは、11月21日～25日の5日間行われた。会場は茂木町のツインリンク、芳賀町町役場周辺、そしてメイン会場として宇都宮市の鬼怒川河川敷の道場宿緑地で開催された。いくつもの市町をまたぎ、より広域的な大会となった。

大会参加機数は、41機と多く、大会の大きさがうかがえる。またとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップは、佐久バルーンフェスティバルや鈴鹿バルーンフェスティバルと違い、海外からも選手を呼んでおり、関東圏初の国際熱気球競技大会なのである。海外からはパイロットだけではなく、オフィシャルボランティアやオブザーバーとして多くの方々が参加しており、グローバルでレベルの高い熱気球大会である。

主催は市民ボランティアから成るとちぎ熱気球選手権実行委員会であり、この組織はもてぎ熱気球選手権実行委員会から引き継いだものであるため、運営ノウハウがある程度定着している。プログラムの協賛社は、宇都宮市、芳賀町、茂木町合わせて49社に上った。また大会ポスターは約4000枚、大会チラシは約40000万枚以上配布し、大会告知を図った。チラ

²³ 財団法人日本航空協会 2006 栃木熱気球世界選手権組織委員会「2006 熱気球ワールドホンダグランプリ 最終戦併催 2006 栃木熱気球世界選手権公式記録」、宇都宮市役所提供資料「宇都宮バルーンフェスティバル 2006 開催報告書」参照。

²⁴ とちぎ熱気球選手権実行委員会提供資料参照。

シは、新たに会場となった宇都宮市内の小学生に配り、周知を図った。

次に実際に大会では、どのようなイベントが行われたのかを見ていこうと思う。11月21日、22日は午前が茂木町のツインリンクで、午後は芳賀町が会場となり行われた。21日はハートフルデーであり、競技気球が飛び立ったあとに、身障者を招待し、体験搭乗を行った。体験搭乗にはドア付きのバスケットを用意し、お年寄りや身障者でも乗り降りしやすくするなど工夫がされていた。22日はキッズデーであり、茂木小学校の5、6年生に競技の一斉離陸を見てもらったあとに、実際に熱気球に触れてもらい、どのような仕組みで、どのように立ち上げるかなどを体験してもらう熱気球教室を行った。その後、立ち上げた熱気球で体験搭乗を行った。21、22日は平日であり、競技と招待した人たちへ体験搭乗を行うだけで、そのほかのイベントは行われなかった。しかし、朝早くから多くの人がツインリンクの会場に集まり、競技を観戦し楽しんでた。また21日の午後は競技飛行だけであったが、ゴール地点には近所の方々や気球ファンが集まり、競技気球を応援していた。

23日から25日までは宇都宮市の道場宿緑地が会場となり開催された（図表6-2）。23日の競技ではマキシマム・ディスタンスというスタート地点がゴールとなる競技が行われた会場から一斉離陸した熱気球がもう一度ゴール地点に近づくため、長い間会场上空に熱気球が見え、来場者は楽しんでた。また23日はキッズデーであり、ドラえものの形をした「バルエモン」という熱気球も登場し、全3機で係留を行った。そして、風も穏やかだったため来場者には体験搭乗も行い、キッズデーのため、子供は無料で体験搭乗を行った。

また係留のほかにもイベントが行われた。飲食ブースでは、雅秀殿など5店がブースを出した。体験ブースでは、スカイスポーツ、模型飛行機、ベーゴマや凧、宇都宮動物園のふれあい動物園など、さまざまな遊び体験やものづくり体験、動物との触れ合いができるブースを7店出し、にぎわった。またスポンサーブースとして本田技研工業株式会社からペーパークラフトや自動車の展示が行われた。午前中に材料がなくなってしまうなどどの店も大盛況であった。ステージイベントでは、2つの幼稚園の園児による出し物や手品やバルーンアート、熱気球写真講座、サッカーのリフティングなどが行われ、ステージイベントも大盛況であった。体験搭乗後に熱気球教室も行われ、クイズ形式で熱気球の仕組みを勉強してもらい、熱気球の立ち上げを体験してもらった。23日は午後の競技も宇都宮会場で開催され、夜はバルーンイリュージョンも開催され、1日中大変賑わいを見せた。バルーンイリュージョンは、音楽とともに熱気球が灯り、幻想的な光景を作り出すイベントで、21機が参加し、観客を魅了した。

24日、25日は午前の競技は宇都宮会場で行われ、24日の午後は芳賀町で行われた。25日は午前中で競技、イベントはすべて終了した。24日はハートフルデーであり、21日と同じようにドア付きバスケットで招待した身障者の方々に体験搭乗を行った。また一般の方にも体験搭乗を行い、熱気球教室も開催し、来場者は楽しんでた。またその他のイベントも23日より規模が小さくなったが行われた。午後は芳賀町が会場となり競技が行われた。熱気球の競技は直前にならないとタスクやゴール地点が決まらないため、会場を見つけづらい

のだが、芳賀町のゴール地点には早くから多くの観客が来て、ゴールへと近づいてくる熱気球を観戦していた。

夜は、ツインリンクでバルーンイリュージョンが行われた。ツインリンクでのバルーンイリュージョンは、コース上に熱気球が一直線に並び、音楽と花火とコラボレーションするというものである。今年は27機もの熱気球の参加があり、観客を魅了した。バルーンイリュージョンでは、観客と一緒にファイブ・カウントダウンを行い、観客の「バーナーズオン」の声に合わせて火を焚くのだが、今年はアナウンスと観客、バルーンピストの息がぴったり合い、会場全体の一体感を感じることができ、とても感動的であった。25日は午前中だけの開催であったが、宇都宮会場で競技、係留、熱気球教室、ステージイベントなどが行われた。

とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップは、5日間開催された。天候に恵まれ、22日の午後の競技以外は予定通り行われ、イベントにも多くの方々が来場し、盛大に行われた。5日間の観客動員数は102,800人に昇った。宇都宮会場で開催するのは昨年の「宇都宮バルーンフェスティバル」、「栃木熱気球世界選手権」の際に1日だけ会場になったときに次ぎ3回目の開催であるが、ここまで観客動員数を伸ばしたのは素晴らしいことである。

筆者は昨年の大会、今年の大会共に参加したが、今年の観客動員数は昨年と比べものにならないものであった。ボランティアスタッフが総動員しても対応しきれないほどであった。佐賀インターナショナルチャンピオンシップと比べるとまだまだだが、3回目にしてこの集客数は素晴らしいであろう。これは、茂木町が継続して行ってきた「MOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップ」の周知力と宇都宮市の集客力であるだろう。またこのように広域的で大きなイベントを作り上げるには、多くのボランティアスタッフや地域、大学の協力があつた。そこで次章では、とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップにおけるそれぞれの取り組みについてみていき、今後のとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの展望について言及していく。

図表 6-2 会場の様子



熱気球教室



一斉離陸

写真：07.11.23 とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップにて 筆者撮影

第7章 とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの展望

これまでみてきたように、とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップは今年から宇都宮市が加わり、より広域的に行われるようになった。この大会で行政・地域・大学がどのように関わり、大会を作っているかをみていくと共に、これからのとちぎ熱気球イン

ターナショナルチャンピオンシップについて考察し、行政・地域・大学の連携がとれたとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの在り方、街づくりについて提言していく。

第1節 行政・地域・大学の取り組みについて

(1)行政の取り組み～茂木町²⁵、宇都宮市²⁶からの視点～

盛大に行われたとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップであるが、今までの土台を作ってきた茂木町と今年から正式に加わるようになった宇都宮市とでは捉え方や方向性が違うのではないか。この大会における行政の取り組みを見ていくと共に、それぞれのインタビューから、方向性の違いや今後の課題等を探っていくことにする。

まず大会開催に関して行政が関わっていることは、茂木町、芳賀町、市貝町、宇都宮市の行政とツインリンクでとちぎ熱気球連絡会議を作って大会を支援していることである。この連絡会議は市民ボランティアからなる大会主催組織であるとちぎ熱気球選手権実行委員会のバックアップをする組織であり、主に観客対策などの駐車場や会場の警備などを行っている。

次に茂木町のこの大会を通しての街づくりについてみていこうと思う。茂木町は1999年からMOTEGI熱気球インターナショナルチャンピオンシップとしてこの大会に関わっている。最初の考えでは佐久市や佐賀市のように気球による街づくりを考えていた。しかし、ツインリンクというもとからあった場所を利用したことで、会場作りの必要や出店もなく、選手の宿泊もツインリンク内であった。そのため町民が大会に関わるのがなく、町民に街づくりの意識が根付かなかったのだ。またツインリンクが会場となったことで、熱気球の大会＝ツインリンク内のイベントという印象がついてしまい、町民に熱気球の大会が浸透するのが遅くなってしまい、街づくりとして広まらなかった。

大会期間中に選手や関係者が参加するウェルカムパーティーとさよならパーティーをするのだが、そのパーティーを茂木町で開催することで、だんだんと町民の意識に変化が出てきた。徐々に町民と選手たちとの間に交流ができれば、街づくりとしての意識が高まりつつあるところである。また大会ボランティアに参加する町民の数も増えてきており、意識の高まりを感じる事が出来る。

ツインリンク内のイベントという印象から、徐々に茂木町のイベントであり、市民ボランティアが支えている大会であるということが浸透してきたのだが、今年からとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップと名称が変わり、メイン会場が宇都宮市に移行したことで、茂木町の街づくりのあり方も変わってくるであろう。まずどういう面で茂木町が

²⁵茂木町役場税務課柳岡氏へのインタビュー（07.7.5）よりまとめた。

²⁶宇都宮市役所観光交流課板倉氏へのインタビュー（07.6.27）よりまとめた。

支援していけばいいかということである。今まで街づくりをしようと頑張ってきた人たちがどのように関わっていけばいいのかということが挙げられる。今年は表彰式とさよならパーティーを茂木町で行った。このように各市町で役割分担をし、公益的な街づくりを目指していかなければならない。

次に宇都宮市の熱気球による街づくりをみていこうと思う。まず宇都宮市の方角性としては、今の段階では何も決めていないそうだ。市民が楽しみ、盛り上がるイベントをやるという考えであるため、これから大会を継続していくかは、市民の反応次第なのである。行政としては、公共性がないと動きづらいところがあり、公共性があるかどうかは継続してみないと分からないため、2年目の段階ではまだ分からないということであった。

このように今まで大会を行ってきた茂木町と今年からメイン会場になった宇都宮市では、市民の意識や行政の方角性の違いが見られる。茂木町の課題としては、これからの関わり方が挙げられ、宇都宮市の課題としては継続して大会を行うか、これからどのような街づくりを行うかということが挙げられる。

(2)地域の取り組みについて

この大会は何度も言ってきたように市民ボランティアが主催組織を作り、運営している大会である。主催組織である「とちぎ熱気球選手権実行委員会」はすべてボランティアにより構成されており、大会開催に係る総合的な計画、協力団体との連絡調整、大会関連のイベントの運営、総合開・閉会式などの事業を行っている。この組織は、MOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップのときの実行委員会から引き続き参加している人が多く組織的には今年からの組織だが、経験者が多いのが特徴である。

市民ボランティアが大会を主催し、運営しているということがこの大会の大きな特徴であると思う。大会の計画から開・閉会式に至るまで、大会運営に係る全てのことを行っており、この組織が地域に根付くことは大変素晴らしいことである。また実行委員会のほかに当日のボランティアを募り、大会期間中はさらに多くの市民ボランティアが参画している。このボランティアは、MOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップのときから参加している人が多く、継続してこの大会に参加している。さらに栃木県内のボランティアも多く、地域に根付いてきていることが分かる。このように茂木町で開催していたころからのボランティアが継続して大会に関わっており、市民の街づくりの意識の高さが伺える。

次に開催地域についてみていこうと思う。熱気球は離着陸地に刈り終えた田んぼや畑を利用し、さらにバーナーの音などでトラブルが生じやすい。そのため地域住民の理解が無くては、行えないものである。

昨年初めて会場となった宇都宮市の道場宿緑地がある清原自治区では、地域住民の理解・協力を得るために様々なことを行った²⁷。清原自治区には、清原地域振興協議会（以下、清振

²⁷清原地区地域振興推進協議会副会長である塩入氏へのインタビュー（07.8.20）および提供資料よりまとめた。

協という）という組織があり、清原地区の地域の問題に積極的・組織的に「オール清原」で対応するための組織であり、自治会とは別に、地域のまちづくりに根ざした活動を行っているものである。昨年は、清振協が協力をし、大会に大きく関わった。

まず、地元地域の代表として実行委員会に参加した。そして広報活動として、大会開催のチラシを作成し、各自治会での回覧、関係先へ配布した。また大会ポスターの掲示依頼を各自治会、学校、商業施設等へ行い、会場付近店舗に道路案内看板設置依頼を行った。さらにイベントの手配や模擬店の手配、選手への宿泊所の無償提供、大会要員としての協力等を行った。

また事前会場清掃として、清原地区住民親子や関係各位の協力で道場宿緑地の清掃、地元農家に会場駐車場の草刈を依頼し、実施した。会場の清掃作業には約 200 人もの参加者があり、清掃終了後、参加者を対象に熱気球体験搭乗会を実施し、大会告知を行った。

昨年は清振協に参加協力が来て、このようなことを行い、住民に理解・協力を得ることが出来た。今年は会場の清掃作業を継続して行い、多くの地域住民と大会に参加するボランティアスタッフが参加した（図表 7-1-1）。また清掃終了後、中学生以下を優先とした熱気球体験搭乗会を実施した。さらに大会のポスターを配り、大会告知を行った。

このように大会への理解・協力を得るために住民を巻き込んだ事業を行い、地域住民には大会告知を行っている。実際に今年の清掃作業に筆者も参加したが、朝早く寒い中、多くの住民が参加しており、ポスターを快く引き受けてくれたり、「昨年も参加した」と笑顔で手伝ってくれる小学生もいたり、住民の理解・協力は大方得られているようであった。またなかには、早く熱気球が根付いて欲しいという人もいた。昨年から行ってきた大会の告知や清掃作業、体験搭乗会の成果であろう。

図表 7-1-1 道場宿緑地会場の清掃作業の様子



写真：07.11.17 宇都宮市道場宿緑地にて筆者撮影

とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップでは、大会ロゴマークを一般公募しており、最優秀賞には賞金 5 万円と大会ロゴマークをプリントしたオフィシャルウェア、優秀賞にもオフィシャルウェアを贈呈するなど地域に呼びかけを行っている（図表 7-1-2）。最優秀賞には大会期間中にオフィシャル気球によるフリーフライト体験を行った。

MOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップからの継続したボランティアの参加、新しい会場での地域住民の理解・協力はある程度得られていると思う。しかし、今年は観客動員数が 10 万人を越え、売店やインフォメーション、誘導、警備など今までの数のボランティアでは対応仕切れなかった部分がある。これからさらに大会が大きくなると、今以上のボランティアが必要となってくる。この大会を支え、成功させるためには、もっと多くのボランティアの募集をかけなければならない。また依然と熱気球の大会はツインリンクが主催であるというイメージがついているので、より多くの人々に大会告知をし、理解・協力を得なければならないであろう。

図表 7-1-2 2007 大会ロゴマーク



資料：NPO 法人 熱気球運営機構（Air-B）HP「AirB NEWS」http://www.air-b.com/airb_new/news/news070925_01.html

(3)宇都宮大学熱気球サークルの取り組み

佐賀インターナショナルバルーンフェスタでは、佐賀大学が競技スタッフとして、鈴鹿バルーンフェスティバルでは鈴鹿国際大学が係留などに行政と共同で作製した熱気球で参加している。とちぎインターナショナルチャンピオンシップでは地元大学がどのように関わっているのか見ていくことにする。

MOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップでは、地元大学はほとんど関わっていなかった。しかし、昨年の栃木熱気球世界選手権に宇都宮大学の学生が運営のボランティアで参加したのを機に、大学内に熱気球サークルを作り活動している。筆者もサークルの一員だが、熱気球による地域活性化を目指し、積極的に活動をしている。

具体的に大会ではどのような活動をしているか見ていこうと思う。今年の大会では、大会期間中、運営のボランティアスタッフとして、係留やフリースライトのクルー、警備、売店などさまざまなことで参加した。宇都宮大学熱気球サークルは、熱気球によって地域活性化を考え、活動している。そのためより観客との距離が近い運営スタッフとして参加し、熱気球を広めているのだ。また大会前の活動としては、大会告知ポスターを商店などに配布し、大会告知を行い、さらに道場宿緑地会場の清掃作業と熱気球体験搭乗会に参加した。8月に行われた「バルーンフェスタ in 代々木」にも参加し、係留などの手伝いをし、大会告知を行った。

まだ発足して1年ほどしか経っていないため、理想の活動が出来ていないのが現状である。将来的には、大会告知イベントや小学校への熱気球教室などを宇都宮大学熱気球サークルが行い、また大会にも係留やバルーンイリュージョンなどに参加し、地域に密着した活動を行うことで、地域貢献、地域活性化につなげたいと考えている。

大会に参加し、地域活性化を図るとともに、大会を通して地域の人々と交流を持つことも大事なことであると思う。大会にはさまざまな年齢、職業の人々がボランティアとして参加している。大学という枠を越え、地域のさまざまな人々と交流を持つことで、自分の考えの幅を広げたり、新たなつながりを持てたりと、大学では得られないようなことを得ることが出来るであろう。実際に筆者もさまざまな年齢、職業の人と出会い、いろいろなお話を聞くことができ、自分の考えを深めることが出来た。また、全国各地、海外から選手やボランティアが来るため、全国各地に知り合いができることも魅力である。

熱気球サークルの課題としては、まだサークルが発足したばかりで、大学内で認知度が少ないことによる部員不足が挙げられる。またとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの開催時期が、宇都宮大学の学園祭と重なっていることである。そのため大学生の参加が不足してしまうのである。学園祭の日程は仕方が無いが、部員不足は継続して活動を行うことで増やしていかなければならないであろう。

第2節 先進事例からみるとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップ

(1)積極的な広報活動

第1節では、とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの組織体制や地域・大学の協力についてみてきた。今後とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップが発展していくにはどうすればいいか、先進事例を基に考察していくことにする。

まず認知度が低く、県内にですらあまり知られていないことが問題として挙げられる。茂木町で行っていたときの会場であるツインリンクのイメージが強すぎて、ツインリンクが主催している熱気球のイベントと思っている人が多いのが現状である。また今年から宇都宮市がメイン会場となったこともあまり知られていなく、広報不足が感じられる。

佐賀インターナショナルバルーンフェスタでは、佐賀市の人口が約24万人²⁸に対し、約3.5倍の約87万人の観客動員数があった。佐賀県内だけでなく九州地方からの来場が全体の48%もあり、関東地方からも全体の1%、約9,000人もの人が来場している。

栃木県は関東圏に属し、新幹線も通っていることから東京など大都市からのアクセスが非常によい。もっと積極的に東京などで広報を行うことで、より多くの集客が見込めるであろう。またとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップは関東圏で唯一の国際大会であり、ハイレベルな競技が関東圏で唯一見られる大会である。バックに東京という大都市を抱えていること、関東で唯一の国際大会であることから、とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップが佐賀インターナショナルバルーンフェスタを越える大会へと発展していく可能性は多いにある。

そのためには県内はもちろんのこと東京など県外への広報をしていかなければならない。東京での告知には、8月に行われているバルーンフェスタ in 代々木への積極的な参加が有効であろう。バルーンフェスタ in 代々木では佐賀市、鈴鹿市などのブースが出ており、大会のPRと共に市のPRも行われていた。とちぎインターナショナルチャンピオンシップの宣伝はほとんどなく、夜間係留の際に紹介される程度であった。東京で行われるバルーンフェスタに東京の一番近くで大会を開催する宇都宮市が積極的にPRを行わなくていいものだろうか。とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップも東京で多いにPRをし、集客につなげなければならない。東京でのPR活動と共に、県内でも告知をし、認知度を上げなければならないであろう。そのためにも毎年継続して大会を行うことが重要である。県外への告知と継続して大会を行うことが今後のとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの発展へとつながると思う。

(2)中核となるキーマンの必要性

佐久市では地域の中に熱気球で街を盛り上げようと活動している人たちがいた。熱気球部会を立ち上げ、各学校や団体でイベント係留や気球に乗ってサンタがプレゼントを配るというサンタイベント、熱気球教室などを行い、地域に熱気球を広めていった。佐賀市でも、

²⁸ 佐賀市役所 HP「佐賀市の人口」。 <http://www.city.saga.lg.jp/contents.jsp?id=1340>

佐賀市職員が佐賀の駅長室に1週間通いつめて「JR バルーン佐賀駅」という臨時駅を実現させたのであり、市職員の大会への思いが伝わるものでもある。このように佐久バルーンフェスティバルや佐賀インターナショナルバルーンフェスタでは、熱気球で街を盛り上げたい、熱気球を街の文化にしたいという熱い思いを持った人がいる。

とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップでは、実行委員会においてもMOTEGI 熱気球インターナショナルチャンピオンシップの時の実行委員会から引き継いでいる人が多いが、組織的には今年からの組織であり、まだ中核となる人物がいなのが現状である。

また宇都宮市がもっと積極的に街づくりとして活動していないのも問題である。行政としては市民の反応がなければ動きづらいということだが、観客動員数が今年は10万人を超え、盛大に行われたのだから、街づくりとして積極的に関わってほしいと思う。

実行委員会やボランティア、行政の中に大会を盛り上げていくような“熱い人”が必要である。地域にそのような人が存在し、大会を盛り上げていくことで、地域が活性化され、街全体が盛り上がるのだと思う。

第3節 とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップを超えた街づくりへ

とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップは、行政と地域だけでなく、地元大学が関わっているということが特徴として挙げられる。また地元大学である宇都宮大学の熱気球サークルは、この大会の運営部分に関わっており、他のホンダグランプリ開催地域とは関わり方に違いがある。このように大学が運営面で活躍しているという特色を活かし、行政と地域、そして大学の連携がとれた大会作りはできないのだろうか。行政・地域の間在大学を挟むことにより、より活発的な街づくりを行えるであろう。

この大会は今年から宇都宮市や芳賀町、茂木町などを含めた広域的な大会となった。まずこれを機に、関わっている市町で大会PRのために熱気球を作製すべきである。広報に力を入れなくては、県外はもちろん県内から集客することは難しいであろう。大会の告知、さらには市町のPRを兼ねて市町のネーム入り熱気球を作製し、大会はもちろん、その他のイベントでの係留や小学校での熱気球教室などでその熱気球を利用し、もっと周知しなければならない。第3章の第4節でみたように佐賀市を始め、他のホンダグランプリ開催地では、それぞれの熱気球を所持しており、大会や市のPRにつなげている。熱気球を作製し、宇都宮市を中心に芳賀町、茂木町など広域的に熱気球による街づくりを行い、栃木県の魅力を伝えていくことができると思う。

栃木県は、50万人都市の宇都宮市を抱える一方で、車で少し走ると田園風景が広がる都市と自然が共存している県である。関東平野にあり、他県と比べてとても空が広く、晴天率が高い。熱気球を見上げることによって、この栃木県の天空や自然のすばらしさ、自然の脅威

を改めて感じるができるだろう。さらに小学校への熱気球教室や係留などを通して、子供たちに夢や希望を与えることができる。多くの人に熱気球があがる大空を見上げ、自然を感じて欲しいと思う。この経験を通して「自然と共存している」という単純だが、今の日本人が忘れがちなことを学ぶことができるだろう。

また熱気球は大きく、目を引くため、市町のPRに利用できるとても有効な広告媒体である。熱気球を作製することによって、大会だけでなく、他のイベントで係留を行うことで市町のPRにつながる。またクリスマス時期にバルーンイリュージョンを行うなど、観光資源としても利用できる。バルーンフェスタ in 代々木においても、他都市のように自作の熱気球で係留やバルーンイリュージョンを積極的に行い、PRをするべきである。まだまだバルーンフェスタ in 代々木では、とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップの広報が足りなく、積極性が見られない。熱気球がないとPR力に欠けてしまい、観客から見た印象も違ってくる。やはり大都市から集客するためにも、熱気球の作製は必至だろう。

そこで問題となるのが作製した熱気球の管理だが、熱気球の管理を宇都宮大学熱気球サークルへ担ってもらうことが一番妥当であろう。熱気球を作製しても行政の方ではなかなか管理しにくいと、大学の熱気球サークルへ貸与することで、よりよい管理ができると思う。宇都宮大学熱気球サークルでは、現在使っている機体の耐久年数の問題が生じており、行政から熱気球が貸与されることによりその問題が解決する。さらに貸与された熱気球でパイロットの育成が行え、熱気球教室などへ参加することで、地域貢献につながるなどメリットがある。

行政と大学が連携し熱気球を所有することで、お互いのデメリットを補い、潤滑な活動ができるであろう。行政による熱気球の作製と行政と大学の連携、さらには行政と大学、地域との交流を経ることにより、合理的な街づくりが行われると思う。

大学の人材を利用することにより、行政と地域ボランティアだけでは難しい平日なども動きやすくなる。特に小学校で行う熱気球教室などは平日に行うため地域のボランティアでは参加することが難しいが、平日の都合のつきやすい学生に参加してもらうことで負担をかけずに行うことができる。大学としては、普段はあまり交流のない地域の人々と交流することで、大学内では体験できないことを体験でき、社会勉強にもなる。宇都宮大学には教育学部があり、小学校などで熱気球教室を行うことで教育学部の学生にもよい経験になる。

地域の中に大学が入っていき、交流を持つことで地域の活性化がより図れるのではないかと考える。さらに大学の学生が行政や地域との交流を持つことで、その中から“熱い人”が出てくるのではないかと考える。大学の学生が行政、地域の活性化を担い、地域活性化、街づくりにつながると思う。

地域でのイベントや大会告知の係留などを行うことで地域交流を図り、地域全体の熱気球の認知度や支持を上げ、地域の意識を変えていかなければならない。そして熱気球を通して、栃木県の魅力や自然の驚異、夢や希望を伝えていけたらいいと思う。そのためにも行政と大学が協力して、熱気球を所有し、イベントなどに参加することで地域へと浸透させてい

かなければならない。イベントや熱気球教室などの中に、若い学生が参加することで地域とのコミュニケーションがより活発になり、その中から街づくりの意識改革がより行われやすくなるだろう。大学の学生がよい活性剤となり、地域へと熱気球が広まり、地域活性化を行うことができたなら、とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップを超えて、関わっている市町全体に熱気球の文化が広がり、街づくりへとつながっていくだろう。

おわりに

本論では、熱気球ホンダグランプリの意義や開催都市における街づくり、課題、そして栃木県における熱気球による街づくりについて言及し、これからの栃木県の熱気球による広

域的な街づくりについて提言してきた。

宇都宮市を中心とした広域的な街づくりを行い、熱気球を通して栃木県の魅力や夢や希望、自然のすばらしさを伝えることができればいいと思う。熱気球をスカイスポーツとして楽しむだけでなく、大空という自然を感じ、自然とともに生きているということを多くの人に知ってもらいたい。

今は Air-B の人々やそのほかの地域の人々に支えられ大会を運営しているが、今後主催組織が地域に根付き、地域運営で大きな大会を作り上げるのが理想である。行政・地域の中に大学という活性剤が加わることで、地域活性化を図り、街全体で熱気球による街づくりを行えるような意識を作り上げたいと思う。

忙しい現代、空をゆっくりと眺めたり、自然を感じたりすることが少なくなっている。このとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップを通して、自然を感じ、自然と共存しているということを思い出してほしい。親子で空を見上げたり、イベントを楽しんだりと家族が安心して楽しめ、栃木の人々が熱気球や大空を自慢できる大会を目指していきたい。そういう環境の中に夢や希望が生まれてくるのだと思う。

筆者が思い描くとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップ、熱気球による街づくりは、現実となるのはまだまだ先のことだと思うが、着実に今年一步を踏み出した。課題は多く残されているが、ひとつひとつ解決し、栃木県に熱気球が定着していった欲しい。そして将来、栃木県の子供たちが栃木県の持つ大空や自然の魅力を自慢し、大会やイベントに多くの観光客が集まり、大空の下、家族で熱気球やイベントを楽しむ姿を見たい。

参考：「熱気球の基礎知識」

ここでは、熱気球の基礎知識や競技などについて整理し、理解を深めたいと思う。本論文を読むにあたって参考にさせていただきたい。

(1) 熱気球の概要²⁹

①熱気球の構造

気球の種類は主に熱気球、ガス気球、ロジェ気球の3種類があり、この種類は浮力を得る方法により分けられている。熱気球の浮力は暖かい空気である。ガス気球は、空気より軽い気体（ヘリウムや水素）を集め浮力を得ている。ロジェ気球は、熱気球とガス気球の両方の浮力を併せて利用したもので、世界一周などの長距離飛行に使われている。

熱気球についてさらに詳しい原理をみてみようと思う。熱気球は「熱い空気は冷たい空気よりも軽い」という原理のもと、外気との比重の違いにより発生する浮力により上昇し、飛ぶ乗り物である。球皮と呼ばれる袋の中の空気を下部に取り付けたバーナーで熱し、浮力を付け飛んでいるのだ。移動は、バーナーからの熱の調整による上昇、下降のみ可能であり、風によって横の移動をしている。風は、高度により向きや強さが異なるため、パイロットは進みたい方向の風を読み、高度を調節し、目的地を目指す。そのため、パイロットには、風の向きや天候を読む知識や技術が必要となってくる。

次に、熱気球の基本的な構造について述べたいと思う。熱気球は大まかに球皮、バーナー、バスケットから構成されている（図表1）。それぞれの構造をみていきたいと思う。

まず、球皮とは、エンベロープとも呼ばれるもので、バーナーで暖められた空気を閉じ込め、浮力を発生させる巨大な袋のことである。気球全体の荷重を支える強化部分であり、気球の骨組みにあたる丈夫なロードテープと呼ばれるものにナイロンなどの布のパネルを縫いつけて作られている。パネルに使うナイロンは軽くて丈夫だが、スカートと呼ばれるバーナーに近い部分は、バーナーの熱を受けるために燃えにくい特殊な布を使用している。また、天頂部にはパラシュート型をしたリップバルブという排気弁があり、バスケットまで垂れたリップラインと呼ばれるロープを引くことでこの排気弁が開き、中の熱気が排出されるようになっている。また、ロープを離すとリップバルブは再び閉じるようになっている。リップバルブは、熱気球の運動・抑制に重要な役割を果たす部分である。球皮の大きさは、中に空気を入れ立ち上げると直径15～17 m、高さ20～25 mになり、中の空気の温度は、外気温や積載重量にもよるが約70～100℃になる。

バーナーは、熱気球の心臓ともいえる大切な装置であり、液化プロパンガスを燃焼させ短時間で大量の熱気を球皮内に送り込む装置である。家庭用コンロの1000倍以上の出力がある。

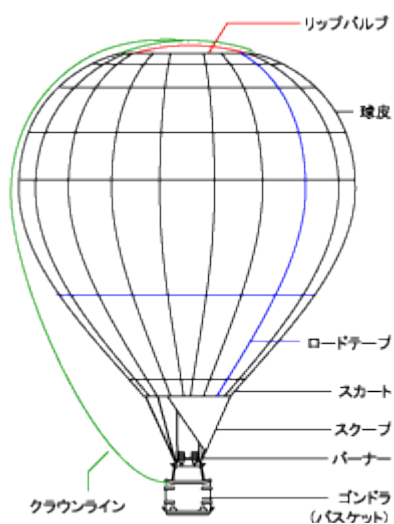
バスケットは、ゴンドラとも呼ばれ、熱気球の搭乗部分である。着陸の衝撃を和らげるた

²⁹日本気球連盟 HP「気球について」<http://www.jballoon.jp/jimu/aboutballoon.html>、
NPO 法人熱気球運営機構（Air-B） HP「熱気球の構造」<http://www.air-b.com/3.balloon/shiru/structure.htm>、
ツインリンクもてぎ | 熱気球ホンダグランプリ HP「熱気球の構造」http://www.mobilityland.co.jp/balloon/what_balloon/3.htmlを参照。

めに、籐を編んで作られたものが一般的である。籐の利点としては、軽量であること、着陸時のショック吸収に優れていることなどが挙げられる。形は、一般的には四角形または三角形、1㎡程度の底面で、2～3人乗りである。

運ぶときは、これらのものと燃料ポンプ、その他の機材をワンボックスカーに入れて運ぶ。

図表1 熱気球の構成図



資料：ツインリンクもてぎ | 熱気球ホンダグランプリ「熱気球の構造」

http://www.mobilityland.co.jp/balloon/what_balloon/3.html

②熱気球の大きさ・形

先程も大きさについて少し触れたが、一口に熱気球といってもさまざまな大きさがあり、球皮部分の体積でクラス分けされている。ここでは、一般的な球皮部分の体積が2000立方メートル前後の熱気球の大きさを紹介する。あくまでもこれは目安であって、季節や

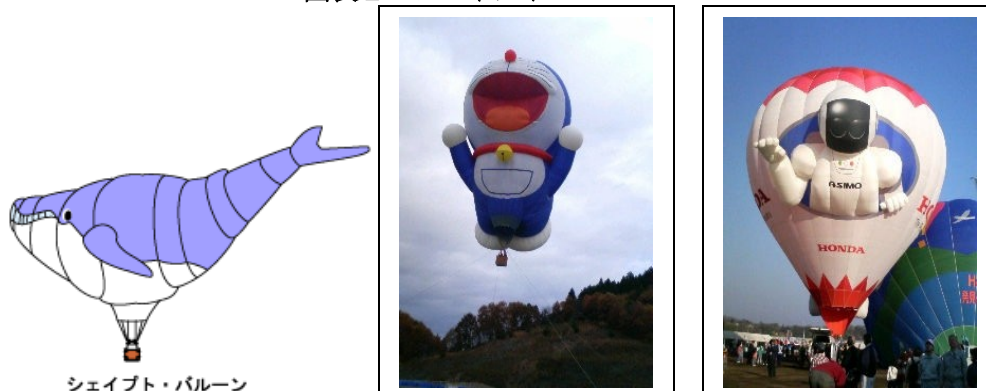
外気温などの条件で数字は変化するのでご了承願いたい。

このクラスの熱気球は、空気を入れ立ち上げた状態で、横幅は約 17 m、高さはバスケットの下から球皮の天頂部までで約 20 m である。これは、マンションの 7 階くらいの高さである。重さは、球皮だけで 90 k g 前後あり、これにバーナーやバスケット、その他の機材、燃料ボンベ（フライトの場合は 3、4 本積む）の重さを加えると約 300 k g となる。

熱気球の形は、一般的には球皮が水滴を逆さまにしたような逆水滴型をしている。これは、より小さい表面積（使用する布が少ないことにより軽量化を図る）で大きな浮力を得られるように設計されているためである。

また、一般的な熱気球とは違い、動物や車、建物、ドラえもんのようなキャラクターの形をした熱気球もある（図表 2）。これは、シェイプト・バルーンと呼ばれるもので、主にイベントなどで使用されている。熱気球ホンダグランプリでは、係留にドラえもんのシェイプト・バルーンで、バルエモンという名前がつけられたものが使用されており、子供たちに大変人気がある。また、ASIMO が顔を突き出している熱気球もある。

図表 2 シェイプト・バルーン



資料：ツインリンクもてぎ | 熱気球ホンダグランプリ「熱気球の構造

http://www.mobilityland.co.jp/balloon/what_balloon/3.html

写真：右 06.11.26 栃木県茂木町 左 07.5.04 長野県佐久市 筆者撮影

（2） 熱気球の飛行について

①熱気球の飛行場所・飛行条件³⁰

³⁰ NPO 法人熱気球運営機構（Air-B）HP「飛行条件」<http://www.air-b.com/3.balloon/miru/condition.htm>、ツインリンクもてぎ | 熱気球ホンダグランプリ HP「熱気球とは 飛行の実際」http://www.mobilityland.co.jp/balloon/what_balloon/2.html、

熱気球の飛行場所としては、球皮を広げ、膨らますための平坦で広い場所が必要であり、さらに高圧線や電柱、建築物等が周辺にないところでなくてはならない。そのため、広い草原、休耕田、河川敷などがよく使われる。広い草原といっても日本では少ないため、刈り取りの済んだ田んぼを着陸地として利用していることが多い。熱気球の飛行最適期は、晩秋から春先であり、温度差で浮く熱気球に適しているからだけでなく、着陸地として収穫の終えた田畑を利用できるからである。日本気球連盟は、主なフライトエリアとして38ヶ所のエリアを挙げている（図表3）が、実際に1年中フライトできる場所は、栃木県藤岡町の渡良瀬遊水地と北海道の一部地域である。

図表3 各地の主なフライトエリア

北海道	上士幌・札幌・江別・岩見沢・富良野・鹿追・池田・中標津・小清水・和寒
東北地方	五所川原（青森）・横手（秋田）・山形・胆沢（宮城）・大崎平野（宮城） 会津塩川（福島）
上越・北陸地方	小千谷（新潟）・長岡（新潟）・砺波（富山）
関東地方	渡良瀬・那須（栃木）
中部・東海地方	富士山麓（静岡）・諏訪湖・松本（長野）・鈴鹿（三重）・大垣（岐阜）
関西地方	琵琶湖（滋賀）・奈良
中国・四国地方	邑久（岡山）・西条（広島）・阿知須（山口）
九州地方	佐賀・有田（佐賀）・多久（佐賀）・中津（大分）・宇佐（大分）・阿蘇（熊本） 都城（宮崎）

資料：日本気球連盟 HP「国内フライトエリア」より作成

<http://www.jballoon.jp/jimu/area.html>

熱気球は、天候によって飛行できるか否かが大きく左右されるため、次に天候による飛行条件をみていく。

まず、降雨・降雪の場合は、フライト不可である。球皮は大変水に弱く、降雨などの場合、視界が悪く危険なためフライトはできない。雷雲の場合はフライト禁止である。霧の場合は

日本気球連盟 HP「国内フライトエリア」 <http://www.jballoon.jp/jimu/area.html> を参照。

まわりの様子が見えない状態ではフライトはできない。少しの霧で、まわりが見えるようならフライト可能である。あくまでも目安であり、フライト可能・不可能についてはパイロットの判断である。

次に風速についてである。熱気球は風に弱いので、風速 3 m/s 以上で体験搭乗ができなく、4～5 m/s 以上で競技飛行ができない。風速 3～4 m/s というのは、木の葉がさわさわと揺れる程度で、気持ちいいくらいの風であるが、軽く、大きな熱気球の球皮には強い力がかかるのである。また、風には横方向だけでなく、上昇気流といって縦方向の風もある。日中、太陽の高度が高くなり地面が暖まりこの上昇気流が発生してくる。これをサーマルというのだが、熱気球がサーマルの中に入ると、上下にもコントロールが出来なく、その中から抜け出すことが出来なくなり危険である。そのため、サーマルが発生する日中はフライトができなく、フライトは早朝と夕方に行われる。

また熱気球は航空法上「浮遊物」であるが、実際に飛行するためには「飛行通告書（ノータム：NOTAM=Notice To Airman）」を国土交通省航空局に提出しなければならない。飛行場周辺などでの自由飛行には制限があり、また通報義務があるため、国土交通省航空局は提出された飛行通告書に基づき、周辺を飛行する航空機に気球の飛行情報を通知するのである。また場所によってさまざまな飛行制限がある場合もある。そのため、飛行前と飛行中は、離陸地点と着陸地点。その間の飛行空域を地図で正確に把握することが重要となってくる。

②ライセンス³¹

熱気球のパイロットになるには、ライセンスが必要となってくる。ライセンスを取得するには、日本気球連盟³²に認定されたインストラクターのもと指導を受け、トレーニングを積みなくてはならない。実技訓練だけではなく講習会も受講し、熱気球の操縦技術以外にも、燃料のプロパンガスの扱いや気象の知識等を学ぶことが必要となってくる。

まずは日本気球連盟に加入し、日本気球連盟が定めた「熱気球操縦技能証明」いわゆるパイロット・ライセンスを取得する条件を満たさなければならない。条件は、①満 18 歳以上（トレーニングは満 16 歳から可能）、②日本気球連盟の会員であること、③適性検査（自動車運転免許と同等のもの）④講習会受講、⑤飛行試験（実技訓練）である。

この実技訓練中にさまざまな課題をクリアし、インストラクターからの推薦を得られると、日本気球連盟の試験官（イグザミネー）の立会いのもと、実技試験（チェックフライト）と筆記試験が実施される。そしてこの二つの試験に合格すると、パイロットとして自分で熱気球を操縦し、飛行することができるのである。その後は、技術や経験、飛行時間によって各地の気球競技会に出場することができる。

³¹ NPO 法人熱気球運営機構（Air-B）HP「Try」http://www.air-b.com/airb_new/try/try_02.html および日本気球連盟 HP「スタート」<http://www.jballoon.jp/jimu/start.html> を参照。

³² 航空スポーツ機関として、日本国内の気球愛好家によって結成されている。会員相互の親睦を図り、気球飛行の安全と技術の向上及びその研究を目的として設立され、個人会員を主体として成り立つ会員制の団体。

(3) 熱気球の競技³³

①競技内容

大会のフライト実施の判断や競技内容は、各大会の競技委員長がそのときの天候やその他の要素を考え合わせた上で決定する。どこでどのような風が吹いているのかによって競技内容が決まるため、どんな競技を行のか競技の直前になるまでわからない。

熱気球の競技を通常はタスクと呼び、「タスク」は熱気球競技のいわば「競技種目」にあたる。タスクは、熱気球を風に乗せて飛行し、どれだけ目的地（ゴール）に近づけるかを競う競技である。ゴール地点では空中からマーカールと呼ばれる砂袋のついたリボンのようなもの（図表4）を投下し、それとゴール地点との距離を競う。1回のフライトで複数のタスクが実施される。基本的には、1日の朝と夕方に1フライトずつ実施され、それぞれ2時間程度で終わるように設定されている。タスクは規定上全19種類あり、それぞれ異なる競技形式になっている。一つの大会で19種類全てが行われるわけではなく、地理的条件やそのときの気象条件に照らし合わせ、どのタスクを実施するかが決定され、競技開始前のタスク・ブリーフィングによって参加チームに伝えられる。

図表4 マーカールとターゲット



マーカール



×印のターゲット

資料：写真 右 06.11.23 栃木県宇都宮市 筆者撮影

左 NPO 法人熱気球運営機構（Air-B）「競技(タスク)の種類」

<http://www.air-b.com/3.balloon/shiru/kindof-task.htm>

②熱気球の競技（タスク）について

前述したように、タスクは全19種類ある。このタスクを種類で分類すると主に3種類に分けられる。①設定されたゴールを目指し、目標に対する飛行の正確さを競うもの、②移動距離や時間、スピードを競うもの、③進路変更などの飛行運動の正確さを競うものの3種類である。いずれもマーカールの落下地点の計測結果によって獲得ポイントが算出されるという

³³ ツインリンクもてぎ | 熱気球ホンダグランプリ HP「熱気球競技について」

<http://www.mobilityland.co.jp/balloon/game/task/index.html> および

NPO 法人熱気球運営機構（Air-B）HP「競技（タスク）の種類」 <http://www.air-b.com/3.balloon/shiru/kindof-task.htm> を参照。

ルールである。ここでは、代表的な6種類のタスクを紹介する。

設定されたゴールを目指し、目標に対する飛行の正確さを競うタスクには、「ジャッジ・デクレアド・ゴール（J D G）」、「パイロット・デクレアド・ゴール（P D G）」、「フライ・イン（F I N）」、「フライ・オン（F O N）」などがある。

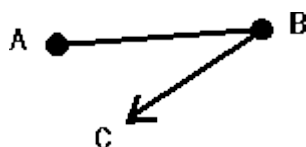
「ジャッジ・デクレアド・ゴール（J D G）」とは、競技本部が指定したゴールを目指す競技である。ゴールにある×印のターゲット（図表 1-3-1）の中心めがけてマーカールを落とし、ターゲットの中心に近いほど高ポイントになる。熱気球が集団でゴールを目指すため、観客にとっては非常に分かりやすい競技である。「パイロット・デクレアド・ゴール（P D G）」は、パイロット自身が離陸前にゴールを宣言し、それぞれが選んだゴールにマーカールを落とす競技である。ゴールは通常、道路の交差点に設けられる。地図と風を正確に読まなければ自分のゴールを間違えることもあり、競技者にとっては多様な実力を試される競技である。「フライ・イン（F I N）」は、競技本部が大会会場内にゴールを1ヶ所決め、競技者はゴールから一定距離以上離れた地点ならどこからでもゴールを目指すことができるという競技である。どの風を利用するか、低空を飛ぶか、高空から一気に目指すかなど、飛来する方向によって戦略が変わってくる。「フライ・オン（F O N）」は、競技者が直前のタスク中にゴールを選び、選んだゴールをマーカールに記入して投下する競技である。この競技の難しさは、フライ・オンのゴールを考えながら目のタスクを行わなければならないことである。パイロットの多様な判断力と戦略が試される。

つぎの移動距離やスピードを競うタスクの代表的なものには、「ミニマム・ディスタンス（M N D）」がある。このタスクは、離陸地点から一斉に離陸し、一定の時間が経過したあと、離陸地点に設定されたターゲットにマーカールを投下する競技である。離陸地点とゴールが同じ場所に設定されるため、離陸地点からできるだけ動かないようにする競技である。

進路変更などの飛行運動の正確さを競うタスクの代表的なものは、「エルボー（E L B）」と呼ばれるものがある。これは、なるべく大きく鋭角に方向転換する競技で、進路変更の角度が大きいほど高ポイントになる（図表 5）。つまり、パイロットは図表 1-3-2 の A B C の3点にマーカールを投下し、この角度が鋭角なほどポイントが高くなる。

また、この19タスク以外に競技規定にはないスペシャル・タスクもある。それは、大会最終日などによく行われる「キー・グラブ・レース」というもので、柱につるされた車の鍵の模型を空中で取ると、車や賞金がもらえるというものである。位置だけでなく高さも合わせないと取れないところがこの競技の難しさである。

図表 5 エルボー



資料：NPO 法人熱気球運営機構（Air-B）「競技（タスク）の種類」
<http://www.air-b.com/3.balloon/shiru/kindof-task.htm>

（４） 熱気球史

①熱気球のはじまり³⁴

人類初の有人飛行を実現させたのは、実は熱気球である。1783年11月21日、フランスのモンゴルフィエ兄弟が成功させた。

モンゴルフィエ兄弟は、煙や湯気の立ち昇る様子からヒントを得て熱気球を始めたと言われる。彼らは、煙が高く昇る理由が何であるかは知らなかったが、煙には空気より軽い成分、空飛ぶ魔力があると信じ、実験を行った。最初は無人気球で実験をし、つぎに動物を乗せ、飛行を成功させた。その後気球に丈夫な綱をつけて飛んでいかなないようにした、いわゆる係留気球で有人実験を何度も行い、自由飛行に備えた。そして、1783年11月21日に貴族のピラートル・ド・ロジェとマルキ・ダルランド侯の二人を乗せ、約25分、約8kmを飛び、人類初の有人飛行に成功した。

また、ちょうど同じ時期にフランスの実験物理学者であるシャルルも「ガス気球」の開発に着手していた。シャルルは、気球が空に浮かぶのは浮力のためであろうと推察し、水素を用いたガス気球の開発を行っていた。ガス気球による有人飛行を目指していたシャルルだが、実験が成功したのは熱気球の有人飛行から10日後のことだった。

篠田皎著の「気球の歴史」では、モンゴルフィエ兄弟以前の気球の発想について言及されているが、どの実験も事実が不明確としている。

熱気球の有人飛行が成功した以後数年間は、気球は科学技術の最先端として各国の関心を集めていたが、1785年にピラートル・ド・ロジェが墜死して以来、熱気球は急速に衰えていった。さらに1903年のライト兄弟による「飛行機」の登場により、熱気球とガス気球は空の活躍舞台から消えていった。

しかし、ガス気球は一部の裕福な人たちによりスポーツとして愛好され続け、気球による記録へのチャレンジの規模も大きくなっていった。

熱気球は、ガス気球に比べ炎を扱う必要があり、その制御の難しさから影の薄い時代が続いた。しかし、第2次世界大戦後、軽くて丈夫な化学繊維の発達や安価なプロパンガスを使って効率よく空気を暖められるバーナーの開発により、熱気球はスカイスポーツとして復活した。

³⁴ 篠田皎「気球の歴史」（講談社、1977年）および
ツインリンク | 熱気球ホンダグランプリ HP「熱気球の歴史」
http://www.mobilityland.co.jp/balloon/what_balloon/index.htmlを参照。

②日本での熱気球の普及³⁵

日本には、江戸時代である 1784 年に気球飛行の成功というニュースが伝わってきた。それとともに気球図も日本に伝わった。気球図をもとに気球を自作し始める人も現れるが、材料の入手が困難だったためガス気球は国内で作ることは不可能であった。熱気球作製の試みもされたが、屋根の上から飛び降りる程度のものだった。しかし、江戸時代末期には、欧米では気球飛行が盛んに行われ、日本にも気球に関する知識が一通り揃った。

明治時代に入ると、欧米からガス気球が持ち込まれ、飛行技術が伝わり、日本でも本格的にガス気球の作成、飛行が行われた。1880 年代には、記念行事にガス気球を飛ばすことが全国的に行われていたのだ。

しかし、その一方でガス気球は主に偵察や観測など軍用に利用されていた。なかでも、気球を利用した爆弾として「風船爆弾」は世界的に有名な気球兵器である。「風船爆弾」とは、爆弾を載せた気球であり、東へ向かう偏西風（ジェット気流）に任せ、直接アメリカ本土を攻撃するという兵器である。実際に、アメリカ本土で山火事を起こし、被害を出している。

その後、飛行船、飛行機などの活躍により気球は姿を消したが、太平洋戦争後、1960 年代には経済成長とともに国内でもスカイスポーツへの関心が高まってきた。

そして、1969 年、当時京都の学生によって製作された自作気球「イカロス 5 号」が日本初の熱気球として飛行に成功したのである。当時日本には、気象観測用気球の資料はあったが、人間が乗るための気球の資料が出回っていなかった。暗中模索で熱気球の技術を探り、資金を稼ぎ、自作気球の飛行を実現させたのだ。この「イカロス 5 号」の飛行に続き、各地の大学探検部、社会人クラブ等を中心に手作り熱気球が作られるようになった。

この大学探検部、社会人クラブを含めた愛好家の集いができ、1973 年 9 月に気球スポーツの母体となる「日本熱気球連盟」が組織され、手作りによる機体製作と飛行技術の研究が行われた。1975 年に「日本気球連盟」と改名をし、現在に至っている。現在、国内の熱気球は約 700 機、連盟登録者数約 2,000 名であり、日本は世界第 4 位の競技人口を有するまでになった。

あとがき

私の卒論テーマである「熱気球」。昨年熱気球と出会って、サークルを作り、趣味として活動をしてきた。3 年生のときは、その趣味である「熱気球」を卒論のテーマにすることはまったく考えていなかった。しかし、熱気球によるまちづくりとして書いてみてはどうかという中村先生のプッシュもあり、晴れて卒論のテーマとなることになった。この「熱気球」を取り

³⁵ 篠田皎「気球の歴史」（講談社、1977 年）、

梅棹エリオ「熱気球イカロス 5 号」（中央公論社、1972 年）p 30-39、

ツインリンク | 熱気球ホンダグランプリ HP「熱気球の歴史」

http://www.mobilityland.co.jp/balloon/what_balloon/index.htmlを参照。

上げたことで、私はほかの人より卒論を楽しんで書くことができたと思う。自分の好きなことを卒論のテーマとして掲げ、それについて調査やインタビューを行うことができ、充実した1年を過ごせた。

まだまだ調査が足りなかったり、理解が足りなく未熟な文章になってしまったが、「熱気球」に対する思いや自分が思う「熱気球によるまちづくり」の理想をぶつけることができた。自分の思いを文章にするということは大変だったが、卒論を通して自分のやりたいことを伝えることができ、とてもよかったと思う。それと同時に自分の意識を再認識することができ、自分のチャレンジをより実現させたいと強く思うようになった。宇都宮大学の熱気球サークルをもっと大きくし、地域と一緒に大会を盛り上げていくようなサークルにしたいと思う。同じ地域に住みながらも今まで地域の人々とかかわることがなかった。きっとほかの学生も同じ環境で、地域の人々とあまりかかわりがないだろう。地域の中に大学があるのだから、もっと地域とかかわりを持つべきであり、地域と大学が密着した社会になってほしいと思う。そのかかわり方のひとつとして、サークルを通じた地域交流を推進したい。そして宇都宮大学の熱気球サークルがひとつの架け橋となっていければと思う。そのような思いを胸に、社会人になっても「熱気球」をやり続け、宇都宮市の空が熱気球でいっぱいになるのを願いながら活動していきたい。

最後になったが、この卒論を読んで、少しでも多くの人が来年のとちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップに行きたいと思ってくれたら幸いである。この卒論で提案したことが将来実現することを祈りながら、終わりとしたいと思う。

2008年1月9日

金田 朋子

謝辞

本論文を書くにあたり、日頃御指導いただいた中村祐司教授に感謝する。またインタビューを受けてくださった板倉氏、塩入氏、溝上氏、下ノ原氏、中原氏、中沢氏、清水氏、坂氏、柳岡氏、町田氏、インタビューの仲介をしてくださった酒井氏、副島氏、牧氏、書籍の推薦をしてくださった高本氏に深謝する。とちぎ熱気球選手権実行委員会のみなさま、約半年間会議に

出させていただいたこと、卒論のことなど声をかけてくださったことなど感謝する。

研究室のメンバーにはいろいろな場面で支えてもらい、心の支えとなった。本当にありがとう。市政研究センターの方々にも大変お世話になった。深く感謝する。

参考文献・資料

- ・宇都宮市役所
「宇都宮バルーンフェスティバル 2006 開催報告書」
- ・梅棹エリオ著
『熱気球イカロス 5 号』（中央公論社、1972 年）
- ・清原地区地域振興推進協議会

- 「宇都宮バルーンフェスティバル清原地区関係協力状況結果」
- ・佐賀市役所
 - 「2006 佐賀インターナショナルバルーンフェスタにおける経済波及効果測定調査」
 - 「バルーンフェスタ in 代々木 事業計画書」
- ・佐賀バルーンフェスタ組織委員会
 - 『2006 佐賀インターナショナル・バルーンフェスタ』
- ・財団法人地域活性化センター
 - 『ふるさとイベント大賞 10 年』（2007 年）
- ・財団法人日本航空協会 2006 栃木熱気球世界選手権組織委員会
 - 『2006 熱気球ワールドホンダグランプリ最終戦併催
2006 栃木熱気球世界選手権公式記録』
- ・佐久市役所
 - 「佐久バルーンフェスティバル開催経過」
 - 「佐久バルーンフェスティバル 2007 事業報告書」
 - 「佐久バルーンフェスティバル 2007 〈実施概要〉」
- ・佐久熱気球クラブ
 - 「パイロット部会事業報告」
- ・佐久バルーンフェスティバル組織委員会
 - 『佐久バルーンフェスティバル 2007』
- ・信濃毎日新聞
 - 「われら NPO 地域からの発信⑭」（2006.10.15）
- ・篠田蛟著
 - 『気球の歴史』（講談社、1977 年）
- ・鈴鹿市役所
 - 「鈴鹿バルーンフェスティバル 2007 実施報告書」
 - 「鈴鹿バルーンフェスティバルの概要」
- ・とちぎ熱気球選手権実行委員会
 - 『とちぎ熱気球インターナショナルチャンピオンシップ』
 - 「とちぎ熱気球選手権実行委員会議事録」
- ・NPO 法人熱気球運営機構（Air-B）
 - 「Hot Air Balloon HONDA Grand Prix-2007 熱気球ホンダグランプリ」
 - 「佐久バルーンフェスティバル 2006 会場アンケート結果」

参考 URL

佐賀市役所「佐賀市の人口」

<http://www.city.saga.lg.jp/contents.jsp?id=1340>

ツインリンクもてぎ | 熱気球ホンダグランプリ「熱気球競技について」

<http://www.mobilityland.co.jp/balloon/game/task/index.html>

ツインリンクもてぎ | 熱気球ホンダグランプリ「熱気球とは 飛行の実際」

http://www.mobilityland.co.jp/balloon/what_balloon/2.html

ツインリンクもてぎ | 熱気球ホンダグランプリ「熱気球の構造」

http://www.mobilityland.co.jp/balloon/what_balloon/3.html

ツインリンク | 熱気球ホンダグランプリ「熱気球の歴史」

http://www.mobilityland.co.jp/balloon/what_balloon/index.html

2007 佐賀インターナショナルバルーンフェスタ

<http://www.sibf.jp/index.php>

2007 佐賀インターナショナルバルーンフェスタ

「佐賀インターナショナルバルーンフェスタへの協賛について」

<http://www.sibf.jp/about/ads/sponsor.php>

2007 佐賀インターナショナルバルーンフェスタ「佐賀バルーンフェスタ組織委員会」[http://](http://www.sibf.jp/about/organization/detail.php)

www.sibf.jp/about/organization/detail.php

2007 佐賀インターナショナルバルーンフェスタ「写真」

<http://www.sibf.jp/about/photograph/>

2007 佐賀インターナショナルバルーンフェスタ「バルーンファンタジア」

<http://www.sibf.jp/fiesta/fantasia/detail.php>

2006 栃木熱気球世界選手権「熱気球世界選手権とは」[http://www.air-](http://www.air-b.com/airb_new/tochigi/02_01.html)

[b.com/airb_new/tochigi/02_01.html](http://www.air-b.com/airb_new/tochigi/02_01.html)

日本気球連盟「気球について」

<http://www.jballoon.jp/jimu/aboutbaloon.html>

日本気球連盟「国内フライトエリア」

<http://www.jballoon.jp/jimu/area.html>

日本気球連盟「スタート」

<http://www.jballoon.jp/jimu/start.html>

日本気球連盟「2007 大会予定」

<http://www.jballoon.jp/jimu/2007taikai.html>

日本の「気球」史

<http://www.tanken.com/kikyu.html>

NPO 法人熱気球運営機構 (Air-B) 「競技 (タスク) の種類」[http://www.air-](http://www.air-b.com/3.balloon/shiru/kindof-task.htm)

[b.com/3.balloon/shiru/kindof-task.htm](http://www.air-b.com/3.balloon/shiru/kindof-task.htm)

NPO 法人熱気球運営機構 (Air-B) 「熱気球の構造」[http://www.air-b.com/3.balloon/shiru/](http://www.air-b.com/3.balloon/shiru/structure.htm)

[structure.htm](http://www.air-b.com/3.balloon/shiru/structure.htm)

NPO 法人熱気球運営機構 (Air-B) 「熱気球ホンダグランプリとは」[http://www.air-](http://www.air-b.com/3.balloon/shiru/structure.htm)

[b.com/2.gp/whats-gp.htm](http://www.air-b.com/2.gp/whats-gp.htm)

NPO 法人熱気球運営機構 (Air-B) 「飛行条件」 <http://www.air-b.com/3.balloon/miru/condition.htm>

NPO 法人熱気球運営機構 (Air-B) 「About Air-B」 http://www.air-b.com/airb_new/about/column/column0403_01.html

NPO 法人 熱気球運営機構 (Air-B) 「AirB NEWS」 http://www.air-b.com/airb_new/news/news070925_01.html

NPO 法人熱気球運営機構 (Air-B) 「Try」
http://www.air-b.com/airb_new/try/try_02.html

インタビュー協力

宇都宮市役所 観光交流課	板倉氏 (07.6.27)
清原地区地域振興推進協議会 副会長	塩入氏 (07.8.20)
佐賀市役所 経済部観光課・文化課	溝上氏 (07.8.25)
佐賀大学 熱気球部	下ノ原氏 (07.10.11)
佐久市役所 観光課観光係	中原氏 (07.7.19)
佐久バルーンフェスティバル常任組織委員	中沢氏 (07.7.19)
鈴鹿国際大学 熱気球部 顧問	清水氏 (07.12.7)
鈴鹿市役所 産業振興部商業観光課観光振興 G	坂氏 (07.9.15)
茂木町役場 税務課	柳岡氏 (07.7.5)
NPO 法人熱気球運営機構 (Air-B) 会長	町田氏 (07.5.12)

(五十音順)

別紙資料

第1章の第2節熱気球ホンダグランプリの概要(2)熱気球ホンダグランプリの歩みを表にした。NPO 法人熱気球運営機構 (Air-B) 会長町田氏からの提供資料「Hot Air Balloon HONDA Grand Prix-2007 熱気球ホンダグランプリ」より作成。

〈グランプリの歩み〉

1993年 熱気球日本グランプリスタート

第1戦 長野県佐久市（2月） 第2戦 北海道上士幌町（8月）
第3戦 三重県鈴鹿市（10月） 第4戦 佐賀県佐賀市（11月）
／全4戦 参加18チーム

1994年 栃木県小山バルーンフェスタが参加

第1戦 長野県佐久市（2月） 第2戦 栃木県小山市（4月）
第3戦 北海道上士幌町（8月） 第4戦 三重県鈴鹿市（10月）
第5戦 佐賀県佐賀市（11月） ／全5戦 参加27チーム

1995年 タイトルスポンサー制を導入「1995熱気球ホンダグランプリ」

第1戦 栃木県小山市（3月） 第2戦 長野県佐久市（4月）
第3戦 北海道上士幌町（8月） 第4戦 三重県鈴鹿市（10月）
第5戦 佐賀県佐賀市（11月） ／全5戦 参加29チーム

1996年

第1戦 栃木県小山市（3月） 第2戦 長野県佐久市（4月）
第3戦 北海道上士幌町（8月） 第4戦 三重県鈴鹿市（10月）
第5戦 佐賀県佐賀市（11月） ／全5戦 参加28チーム

1997年 グランプリ最終戦を世界選手権と同時開催

第1戦 栃木県小山市（3月） 第2戦 長野県佐久市（4月）
第3戦 北海道上士幌町（8月） 第4戦 三重県鈴鹿市（10月）
最終戦 1997佐賀熱気球世界選手権{フェスタ部門}（11月）
／全5戦 参加28チーム

1998年 「熱気球ワールドホンダグランプリ」スタート

第1戦 栃木県茂木町（4月） 第2戦 長野県佐久市（5月）
第3戦 三重県鈴鹿市（10月） 第4戦 宮城県仙台市・大和町（10月）
最終戦 佐賀県佐賀市（11月） ／ジャパンGP全5戦 参加28チーム
ワールドGP第1戦 アメリカ合衆国ウィスコンシン州 MONROE（7月）
ワールドGP第2戦 ルクセンブルク大公国 BOURSCHEID（8月）

ワールド GP 第 3 戦 宮城県仙台市・大和町（ジャパン GP 第 4 戦と同時開催）
／ワールド GP 全 3 戦 参加 25 チーム

1999 年 「ジャパンホンダグランプリ」に海外選手も参戦

第 1 戦 栃木県茂木町（3 月） 第 2 戦 長野県佐久市（5 月）
第 3 戦 三重県鈴鹿市（10 月） 第 4 戦 栃木県茂木町（10 月）
最終戦 佐賀県佐賀市（11 月） ／ジャパン GP 全 5 戦 参加 25 チーム
ワールド GP 第 1 戦 アメリカ合衆国ウィスコンシン州 MONROE（7 月）
ワールド GP 第 2 戦 ルクセンブルク大公国 BOURSCHEID（8 月）
ワールド GP 第 3 戦 栃木県茂木町（ジャパン GP 第 4 戦と同時開催）
／ワールド GP 全 3 戦 参加 25 チーム

2000 年 MOTEGI 大会がワールド／ジャパン両グランプリシリーズの最終戦に

第 1 戦 栃木県藤岡町（4 月） 第 2 戦 長野県佐久市（5 月）
第 3 戦 三重県鈴鹿市（9 月） 第 4 戦 佐賀県佐賀市（11 月）
最終戦 栃木県茂木町（11 月） ／ジャパン GP 全 5 戦 参加 32 チーム
ワールド GP 第 1 戦 アメリカ合衆国ウィスコンシン州 MONROE（6 月）
ワールド GP 第 2 戦 ルクセンブルク大公国 BOURSCHEID（7 月）
ワールド GP 第 3 戦 栃木県茂木町（ジャパン GP 最終戦と同時開催）
／ワールド GP 全 3 戦 参加 29 チーム

2001 年 家畜伝染病でルクセンブルク大会中止 ワールド GP 第 2 戦は佐賀大会に

第 1 戦 栃木県藤岡町（4 月） 第 2 戦 長野県佐久市（5 月）
第 3 戦 三重県鈴鹿市（9 月） 第 4 戦 佐賀県佐賀市（11 月）
最終戦 栃木県茂木町（11 月） ／ジャパン GP 全 5 戦 参加 27 チーム
ワールド GP 第 1 戦 アメリカ合衆国ウィスコンシン州 MONROE（6 月）
ワールド GP 第 2 戦 佐賀県佐賀市（ジャパン GP 第 4 戦と同時開催）
ワールド GP 第 3 戦 栃木県茂木町（ジャパン GP 最終戦と同時開催）
／ワールド GP 全 3 戦 参加 30 チーム

2002 年 ジャパンホンダグランプリシリーズ 累計観客動員数 1,000 万人突破

第 1 戦 栃木県藤岡町（4 月） 第 2 戦 長野県佐久市（5 月）
第 3 戦 三重県鈴鹿市（9 月） 第 4 戦 佐賀県佐賀市（11 月）
最終戦 栃木県茂木町（11 月） ／ジャパン GP 全 5 戦 参加 26 チーム
ワールド GP 第 1 戦 アメリカ合衆国ウィスコンシン州 MONROE（6 月）
ワールド GP 第 2 戦 ルクセンブルク大公国 BOURSCHEID（7 月）

ワールド GP 第 3 戦 栃木県茂木町 (ジャパン GP 最終戦と同時開催)

／ワールド GP 全 3 戦 参加 30 チーム

2003 年 GP10 周年 国際航空連盟より「オノラリー・グループ・ディプロマ」受賞

第 1 戦 栃木県藤岡町 (4 月) 第 2 戦 長野県佐久市 (5 月)

第 3 戦 三重県鈴鹿市 (9 月) 第 4 戦 佐賀県佐賀市 (11 月)

最終戦 栃木県茂木町 (11 月) ／ジャパン GP 全 5 戦 参加 25 チーム

ワールド GP 第 1 戦 アメリカ合衆国ウィスコンシン州 MONROE (6 月)

ワールド GP 第 2 戦 ルクセンブルク大公国 BOURSCHEID (7 月)

ワールド GP 第 3 戦 栃木県茂木町 (ジャパン GP 最終戦と同時開催)

／ワールド GP 全 3 戦 参加 30 チーム

2004 年 世界選手権で日本の GP パイロットたちが躍進 トップテンに 2 名入賞

第 1 戦 栃木県藤岡町 (4 月) 第 2 戦 長野県佐久市 (5 月)

第 3 戦 三重県鈴鹿市 (9 月) 第 4 戦 佐賀県佐賀市 (11 月)

最終戦 栃木県茂木町 (11 月) ／ジャパン GP 全 5 戦 参加 24 チーム

ワールド GP 第 1 戦 アメリカ合衆国ウィスコンシン州 MONROE (6 月)

ワールド GP 第 2 戦 ルクセンブルク大公国 BOURSCHEID (7 月)

ワールド GP 第 3 戦 栃木県茂木町 (ジャパン GP 最終戦と同時開催)

／ワールド GP 全 3 戦 参加 27 チーム

2005 年 MOTEGI 大会が 2006 世界選手権のプレ大会として開催 強豪選手が参戦

第 1 戦 栃木県藤岡町 (4 月) 第 2 戦 長野県佐久市 (5 月)

第 3 戦 三重県鈴鹿市 (9 月) 第 4 戦 佐賀県佐賀市 (11 月)

最終戦 栃木県茂木町 (11 月) ／ジャパン GP 全 5 戦 参加 23 チーム

ワールド GP 第 1 戦 アメリカ合衆国ウィスコンシン州 MONROE (6 月)

ワールド GP 第 2 戦 ルクセンブルク大公国 BOURSCHEID (7 月)

ワールド GP 第 3 戦 栃木県茂木町 (ジャパン GP 最終戦と同時開催)

／ワールド GP 全 3 戦 参加 30 チーム

2006 年 ワールド GP 最終戦の MOTEGI で栃木熱気球世界選手権開催

宇都宮市で初熱気球大会

第 1 戦 栃木県藤岡町 (4 月) 第 2 戦 長野県佐久市 (5 月)

第 3 戦 三重県鈴鹿市 (9 月) 第 4 戦 栃木県宇都宮市 (10 月)

最終戦 佐賀県佐賀市 (11 月) ／ジャパン GP 全 5 戦 参加 23 チーム

ワールド GP 第 1 戦 アメリカ合衆国ウィスコンシン州 MONROE (6 月)

ワールド GP 第 2 戦 ルクセンブルク大公国 BOURSCHEID (7 月)

ワールド GP 第 3 戦 栃木県茂木町・宇都宮市 (熱気球世界選手権と同時開催 11 月)

／ワールド GP 全 3 戦 参加 30 チーム

2007 年 最終戦が宇都宮市を含めた広域的な大会へ

第 1 戦 栃木県藤岡町 (4 月) 第 2 戦 長野県佐久市 (5 月)

第 3 戦 三重県鈴鹿市 (9 月) 第 4 戦 佐賀県佐賀市 (11 月)

最終戦 栃木県宇都宮市・茂木町 (11 月)

／熱気球ホンダグランプリ全 5 戦